

神南地区県営圃場整備事業に伴う 埋蔵文化財調査報告書

御領田遺跡 (Goryōden-SITE)

三部竹崎遺跡 (Sanbu-Takezaki-SITE)

1994年3月

湖陵町教育委員会

正誤表

	誤	正
2頁2行目	神戸水海	神門水海

神南地区県営圃場整備事業に伴う 埋 藏 文 化 財 調 査 報 告 書

御領田遺跡 (Goryōden-SITE)

三部竹崎遺跡 (Sanbu-Takezaki-SITE)

1 9 9 4 年 3 月

湖陵町教育委員会

序

この報告書は、平成5年度に行った御領田遺跡（湖陵町常楽寺）の発掘調査と、三部竹崎遺跡（湖陵町東三部）の遺物を中心とする調査の、いずれも工事中に発見された調査結果の概要をとりまとめたものです。

湖陵町では、平成4年度から継続して、神南地区県営圃場整備事業が行われており、その事業の途上で埋蔵文化財が発見され、緊急に発掘調査が必要となったので、島根県教育委員会文化課の指導で調査を完了したところあります。今回遺跡が発見された水田面は従来、神西湖の湖底と考えられていたところであり、この発見は驚きと感嘆をもって受け止めるに充分なものでした。今までほとんど日の目を見なかった湖陵町の遺跡、歴史が大きくクローズアップされて、私達の歴史観を変貌させ、またそのことは湖陵町の住民として、郷土に夢とロマンを与えてくれる一大発見がありました。

「御領田遺跡」は県内でも珍しい中世の貝塚と縄文時代後期の竪穴住居跡が見つかり、平成6年2月28日には現地説明会を開き、寒いなかを約100名の方に見学していただきました。「三部竹崎遺跡」は弥生時代前期の土器をはじめ、縄文時代、古墳時代前期、中世、近世と連綿と継続する広大な遺跡で、発掘調査をしていないにもかかわらず膨大な量の遺物が採集されました。これらは前述したように従来の考えを一変させるもので、神西湖周辺の歴史を解明するために必要不可欠な遺跡として永きにわたり伝えていかなければなりません。

本書を刊行するにあたり、島根県教育委員会文化課、地元地権者の方々、島根県出雲農林事務所には発掘調査ならびに遺跡の保存に協力していただきましたことを厚く御礼申し上げます。

平成6年3月

湖陵町教育委員会

教育長 立花重男

例 言

1. 本書は島根県出雲農林事務所の委託を受けて湖陵町教育委員会が1993年度(平成5年度)に実施した、神南地区県営圃場整備事業に伴う第3工区埋蔵文化財発掘調査および、第2-2工区域内埋蔵文化財分布調査の調査報告書である。

2. 本書に掲載した遺跡は、「御領田遺跡」と「三部竹崎遺跡」である。

3. 調査組織

調査主体 立花重男(湖陵町教育委員会教育長)

事務局 三原浩治(" 教育課長)

春日貴鉢(" 社会教育係長)

林 恵子(" 社会教育主任)

野坂俊之(" 社会教育主事補)

調査員 角田徳幸(島根県教育委員会文化課文化財係主事)

調査補助員 坂根健悦

発掘作業員 今岡新悦、今岡臣悦、三原明夫、三原正江、大野辰二、大野隆枝、深井良子、立花 獣、三原虎吉、三原フミエ、森山富士夫、吉田健二、吾郷愛子

遺物整理 林 良子、原 照子、中尾綾子

4. 遺跡の調査ならびに保存にあたって、次の方々に指導していただいた。

島根県教育委員会文化課、田中義昭(島根大学法文学部教授)、川上 稔(出雲市教育委員会)

5. 報告書作成にあたって、次の方々に指導、助言をいただいた。

足立克己(島根県教育委員会文化課)、西尾克己、柳浦俊一、卜部吉博、内田律雄、林 健亮、

守岡正司、宮本正保(以上島根県埋蔵文化財調査センター)、松本岩雄(古代文化センター)、

澤田順弘(島根大学理学部)、竹広文明(島根大学汽水域研究センター)

6. 遺物整理にあたり、西尾良一、足立 正両氏から協力をいただいた。

7. 掘図中の方位は、磁北である。

8. 本書に掲載した「遺跡分布図」は建設省国土地理院発行の地形図を使用した。

9. 本書の執筆は調査員と事務局が協議分担してこれを行ない、「御領田遺跡」については角田が「三部竹崎遺跡」は野坂がそれぞれ編集した。なお、それぞれの分担については目次に明示した。

10. 掲載図面は柳浦俊一、角田徳幸、坂根健悦、野坂俊之が作成し、写真は角田徳幸が撮影した。

11. 本書掲載の遺物、及び実測図、写真は湖陵町教育委員会で保管している。

目 次

序

例 言

目 次

1. 調査に至る経緯	（春日）	1
2. 位置と歴史的環境	（野坂）	2
3. 御領田遺跡の調査	（角田）	7
（1）調査の概要		
（2）縄文時代の遺構と遺物		
（3）縄文時代以降の遺構と遺物		
（4）まとめ		
4. 三部竹崎遺跡採集の遺物	（板根・野坂）	27
（1）遺跡の概要		
（2）遺物の概要		

写真図版

御領田遺跡 図版 1 ~ 19

三部竹崎遺跡 図版 20 ~ 29

1. 調査に至る経緯

本町の神南地区県営圃場整備事業計画に基づき、出雲農林事務所から埋蔵文化財等の事前協議を受け、昭和58年7月に県埋蔵文化財保護指導員に依頼し、現地調査を実施した。その際、当地に遺跡はないものと判断し、その旨を回答した。その後、平成5年度事業として、6月4日にそれぞれ工事を発注されたが、その後の経過は次の通りである。

・御領田遺跡

9月20日、土地所有者より工事中に水田から貝塚を発見したと、町教育委員会に連絡があり、埋蔵文化財保護指導員の確認によって圃場の切法面に遺構が存在、県教育庁文化課に連絡し、指導を受けると共に工事の一時中止を発注者並びに企業に申し入れた。

9月22日、県文化課担当者の現地確認を受け、発掘調査を必要とし、その範囲を設定、縄文時代後期から奈良時代までの重要な遺跡と判明し、遺跡発見届を提出した。

9月29日、県文化課、出雲農林事務所耕地第1課、および町関係課と打合せし、発掘調査期間と工事期間等諸問題を協議、貝塚部分は盛土保存保護とし、発掘調査を行うこととした。

その後地権者等の要望によって、工事を再開するため県文化課の専門調査員の派遣をお願いし、平成6年3月までに発掘調査を行った。調査員の全面的な支援によって調査を完了し、事業年度内に圃場整備を行うことが出来た。

・三部竹崎遺跡

面積9haの圃場整備工事中、9月3日に町道常楽寺神南線と篠川南広域農道との交差点の北側約40m付近に、表土約30cmをはぎ取った下から土器類を約10点発見したが、他に出土していないことから流れ込みと判断し、今しばらく工事の状況を見守る事とした。しかし、9月7日に他の地点から土器及び板を数点を発見したので、施工業者に状況を説明した。

その後9月22日、県文化課に確認して頂き、指導に基づき遺跡発見届を9月30日に提出した。また、埋蔵文化財愛好家2名に出会い、9月20日頃から土器・石器・木製品等多數の遺物を発見した旨を聞き、町教育委員会に提出を願い、県文化課へ同日持参した。

11月25日、県文化課に再確認して頂き、工事関係者に正式に工事中止命令を行うと共に今後の対策協議を行った。また、島根大学教授田中義昭氏に連絡を取り、現場状況の観察によって重要な遺跡であるので取扱いを注意するよう指導があった。

12月3日、県文化課に於いて工事の状況や地権者の現状、遺跡保護の観点から工事再開の施工方法等を協議した。12月20日、出雲農林事務所から工事再開許可願い協議書の提出に基づき、町の意見書を添付して申請し、平成6年1月5日、工事再開の条件付回答を県文化課より得、町教育委員会立会によって工事を再開し、平成6年春、作付作業が無事行われた。

2. 位置と歴史的環境

湖陵町は、島根県東部、出雲地方の西部に位置し、神西湖の南西に広がっている。『出雲国風土記』の時代、この神西湖は『神戸水海』と呼ばれ、日本海とつながる入海であった。その後、潟湖となり、大きな湖を形成していた。今回調査の対象となった「御領田遺跡」と「三部竹崎遺跡」はいずれも神西湖の南に注ぐ常楽寺川の東岸に位置する。

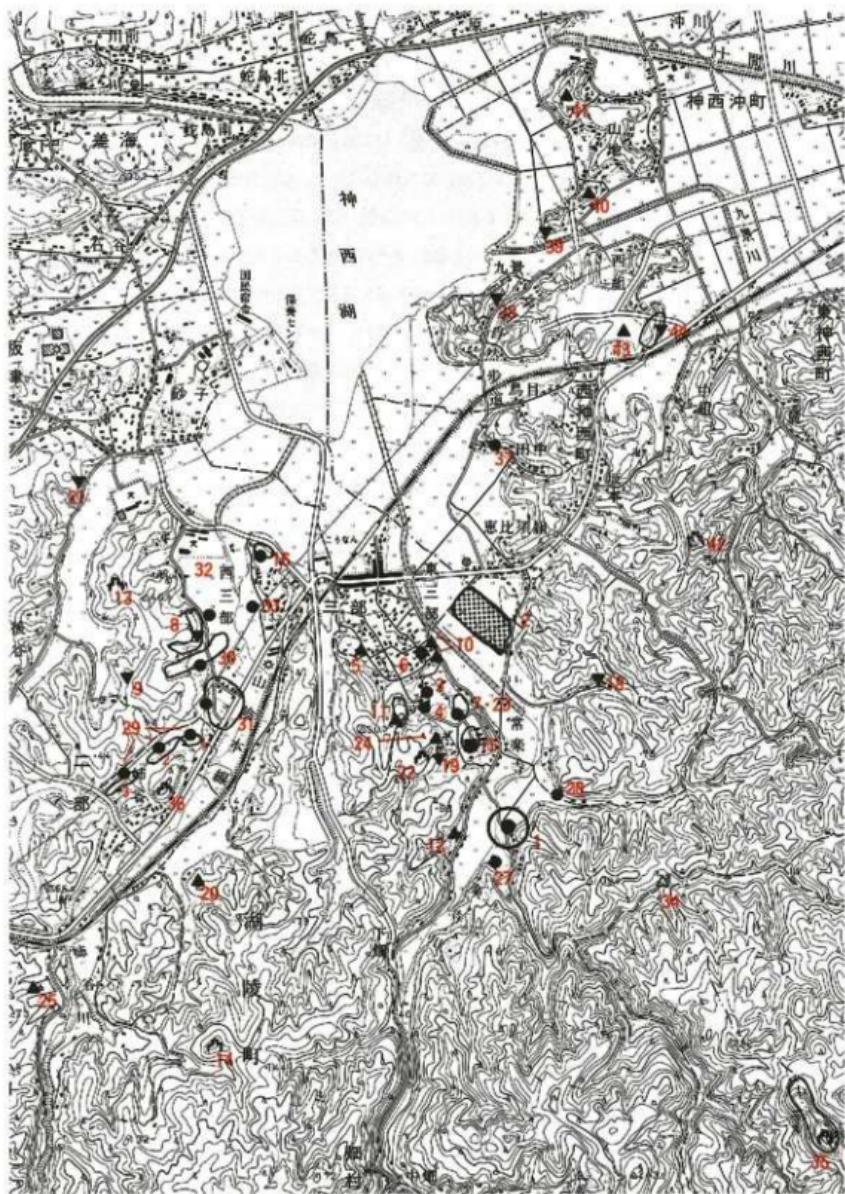
「御領田遺跡」は、常楽寺川と標高306mの二ッ丸山から流れ出る瀬の谷川の合流地点の北東にあり、出雲市境から続く丘陵の終点、山裾の水田に存在する。標高は約13m、丘陵からなだらかに斜面が落ちるところにある。また、「三部竹崎遺跡」は、御領田遺跡から800m北方の水田に位置し、南東から続く丘陵端から約42,000m²に渡る広さをもつ遺跡である。標高は約4~6mで、今まで神西湖の湖底と信じられていたところである。

そもそも湖陵町は、常楽寺の丘陵をはじめとして遺跡の宝庫とされていたところで、そのほとんどが丘陵上に位置するものであるが、縄文時代の遺跡は今まで確認されていなかった。しかし、今回の調査と並行して行なった第5工区試掘調査によって、姉谷恵比須遺跡(31)から縄文土器が出土した。また、平成6年発掘調査した奥ノ谷遺跡(28)では、中津式を中心とする縄文時代後期初頭の遺物が検出された。

弥生時代前期の遺跡としては、前述した姉谷恵比須遺跡から壺の副部が発見されている。弥生時代後期になると、丘陵上に遺跡が現われ、中島遺跡(16)、雲部I・II遺跡(3・4)、竹崎遺跡(6)、庭反I・II遺跡(7・23)などが挙げられる。

古墳時代前期から中期の遺跡としては、舟形石棺をもつといわれる雲部古墳群(11)が挙げられるが明確ではなく、出雲市には神西湖東側丘陵上に山地古墳(40)があり、神西湖周辺では唯一の前期古墳が存在する。また、神西湖南東方向の丘陵裾に田中谷貝塚(37)があって、古墳時代中期頃の集落跡の可能性が高い。後期になると横穴式石室をもつ倉道古墳(5)、森の前古墳群(10)などが出現する。また、横穴墓が盛行し、八幡宮横穴墓群(8)、安子神社横穴墓群(19)、神待山横穴墓群(44)など多數の群をなして形成されるが、築造期間は短期間で、横穴式石室をもつ古墳との関係が密接であるとされる。また、集落跡としての可能性をもつ遺跡としては滝ノ尻遺跡(27)、只谷III遺跡(29-3)が挙げられるが、いずれも平野部に存在する。

奈良時代に入ると昭和60・61年に調査された庭反II遺跡(23)と常楽寺遺跡(15)が注目され、近接する両遺跡からは土師器や須恵器とともに掘立柱建物跡が見つかっている。この常楽寺丘陵上には先に挙げた雲部遺跡、竹崎遺跡などからも土師器、須恵器が出土しており、丘陵全体がこの時期の遺跡であった様相を呈している。低地に目を移すと、只谷I・II遺跡(29-1・2)、保知石谷遺跡



(30)、三部八幡下遺跡(32)が列挙できるが、いずれも散布地の可能性が高く、造構を検出していない。これらの遺跡は造構が丘陵上にあったであろうと推測される。

中世の山城は、特に神西城跡(42)が神西氏の居城として有名である。これに関連して、文献的に日出城跡(13)、造構的に二ツ丸城跡(35)なども注意される。また、庭反Ⅱ遺跡(23)や常楽寺遺跡(15)からも土師質土器、陶磁器などが出土しており、只谷遺跡(29)、保知石谷遺跡(30)、三部八幡下遺跡(32)からも出土している。さて、神西湖の北側に中世の貝塚として上長浜貝塚があり、今回調査した御領田遺跡の貝塚と同時期にあたる。当時の神西湖を復元するのに非常に重要な遺跡である。

近世になると、三部八幡下遺跡(32)や保知石谷遺跡(30)、中島下遺跡(33)など低湿地に墓や杭列、建物跡など生活を営むようになる。いずれも江戸時代後半頃と考えられる。

以上、簡単に神西湖周辺の状況を概観してみたが、時代ごとに生活面が移行しているようである。特に丘陵上と低地間の関係は神西湖の湖岸線と大きく関連していると思われ、非常に重要な問題をはらんでいる。

遺跡分布図一覧表

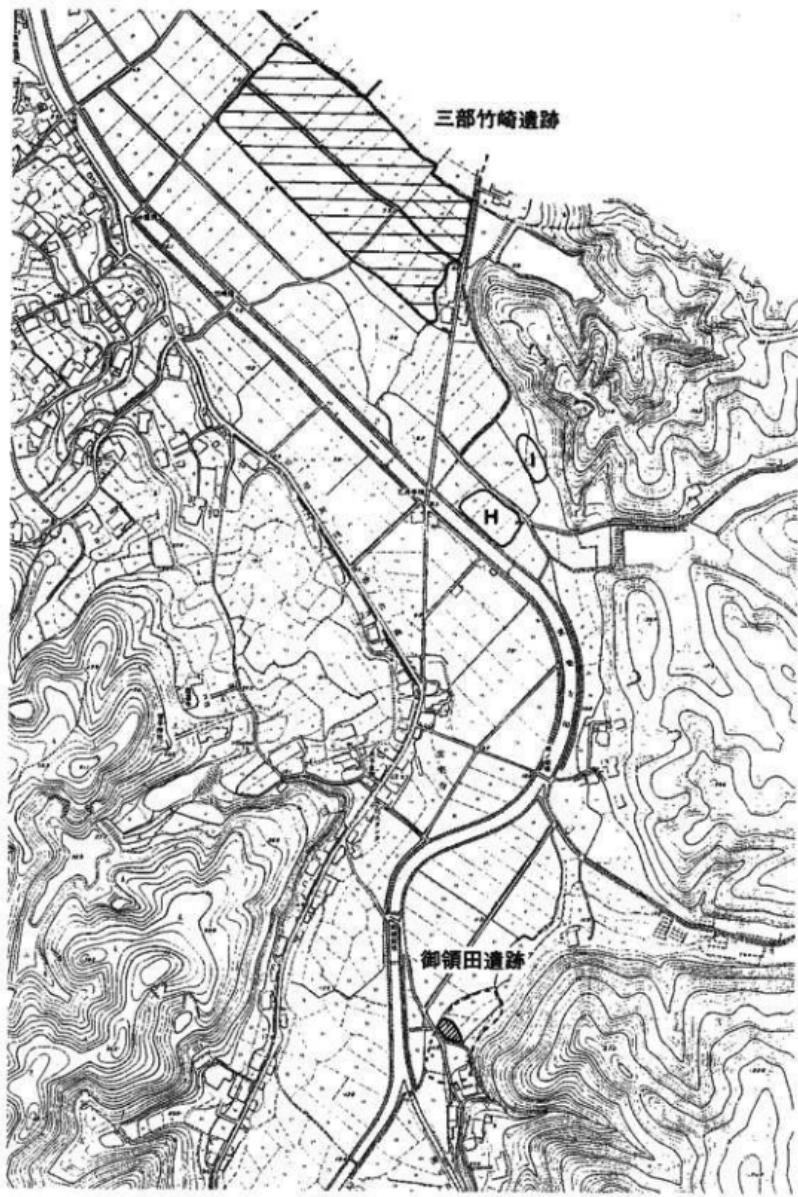
番号	名 称	種 別	概 要	備考・文献
1	御領田遺跡	貝塚、集落跡	堅穴住居跡、シジミ、ハマグリ、建物、施舟製装身具、縄文土器、石器、土師質土器、土師器、須恵器	本報告書
2	三部竹崎遺跡	散布地	縄文土器、弥生土器、土師器、須恵器、石器、木製品、土師質土器、陶磁器、羽口、金属製品	本報告書
3	雲部Ⅰ遺跡	散布地	貝塚、弥生土器、須恵器、土師器、ヤマトシジミ	
4	雲部Ⅱ遺跡	散布地	集落跡、弥生土器、石斧	
5	金瀬古墳	古墳	横穴式石室、直刀、須恵器	消滅 ②
6	竹崎遺跡	散布地	弥生土器、石斧、須恵器 他	
7	庭反Ⅰ遺跡	散布地	集落跡、弥生土器、土師器、須恵器 他	
8	八幡宮横穴群	横穴	8穴確認、家形石棺1基、直刀、須恵器	20穴以上有? ③・④
9	松崎谷横穴群	横穴	3穴、須恵器	⑤
10	森の前古墳群 -1 森の前1号墳 -2 森の前2号墳	古墳	2基 円墳、須恵器	
11	雲部古墳群 -1 雲部1号墳 -2 雲部2号墳 -3 雲部3号墳	古墳	3基 円墳 箱式石棺 円墳、堅穴式石室	②
12	鹿の岩古墳	古墳	横穴式石室、石棺、直刀、須恵器	
13	日出城跡	城跡	山城	別名下桃尾城
14	要宮山城跡	城跡	山城、古墳	④
15	常楽寺遺跡	集落跡	獨立柱建物跡、貝塚、土師器、須恵器、石器、土師質土器、陶磁器	②・⑤
16	中島遺跡	散布地	磨製石斧、弥生土器、土師器 他	②
17	山田谷横穴	横穴	須恵器	所在不明 未
18	ののこ谷横穴群	横穴	須恵器	消滅

番号	名 称	種 別	概 要	編 号・文 献
19	安子神社横穴群	横穴	7~8穴以上、妻入家形、石床、直刀、須恵器	②・⑥
20	柿本田古墳	古墳	円墳、石棺、須恵器 他	封上流出
21	水原横穴群	横穴	2穴、人骨、須恵器	
22	高丸城跡	城跡	山城	②・④
23	庭反Ⅱ遺跡	散布地	獨立柱建物跡、弥生土器、土師器、須恵器、土師質土器、陶磁器	①・②・⑤
24	西造寺山古墳群	古墳	2基、方墳	②
25	狩又古墳群	古墳		
26	大池横穴	横穴	1穴、須恵器	消滅 ※⑥ 別名ずれこば
27	施ノ尻遺跡	散布地	土師器、須恵器、羽口	
28	奥ノ谷遺跡	散布地	縄文土器	平成6年発掘調査
29	只谷遺跡		3遺跡含む	
-1	只谷I遺跡	散布地	須恵器、土師器、上師質土器、陶磁器、漆器、石器 他	平成6年発掘調査
-2	只谷II遺跡		須恵器、土師器、土師質土器 陶磁器、石器 他	平成6年発掘調査
-3	只谷III遺跡		土師器、須恵器、木製品 他	平成6年発掘調査
30	柴知石谷遺跡	古墓 他	須恵器、土師器、土師質土器、木棺(箱型)	平成6年発掘調査
31	仙谷恵比須遺跡	散布地	弥生土器、縄文土器、土師器	平成6年発掘調査 ②
32	三龍八幡下遺跡	散布地	かわらけ、須恵器、土師器、弥生土器、土師質土器、陶磁器	平成6年発掘調査
33	中島下遺跡	古墓	土坑墓、人骨、土師質土器	平成6年発掘調査
34	龜見谷池製鉄跡	製鉄跡	鐵滓	消滅?
35	二ツ丸城跡	城跡	山城	平成7年1月踏査
36	鮎谷城跡	城跡	山城	⑥
37	田中谷貝塚	貝塚	ヤマトシジミ	
38	正久寺横穴群	横穴	須恵器	
39	湖東屋山横穴群	横穴	4穴	
40	山地古墳	古墳	円墳、木棺、船式石棺、彷彿葬、筒形銅器、菅玉	消滅 ⑦
41	佐伯神社古墳	古墳	円墳	
42	神西城跡(高森城)	城跡	山城	④
43	神待山古墳群	古墳	方墳2基、円墳2基	
44	神待山横穴群	横穴	9穴(現存4穴)、直刀、金環 他	

※ = 遺跡分布図に掲載していないもの

文 献

- ① 湖陵町教育委員会・杉原清一「庭反Ⅰ遺跡－昭和60年度緊急発掘調査報告書－」(昭和61年)
- ② 湖陵町教育委員会・杉原清一「庭反Ⅱ遺跡・他 昭和61年度調査報告書」(昭和62年)
- ③ 西尾克己・原田敏照・守岡正司「出雲西部における横穴墓の様相」『町誌研究1』(平成4年)
- ④ 山根正明「湖陵町と周辺の中世城館について(1)」『町誌研究2』(平成5年)
- ⑤ 西尾克己・守岡正司「常楽寺遺跡と庭反Ⅱ遺跡の性格について－出雲西部出土の中世陶磁器を手掛かりとして－」『町誌研究3』(平成6年)
- ⑥ 門脇俊彦ほか『さんいん古代史の周辺』山陰中央新報社(昭和55年)
- ⑦ 出雲市教育委員会「山地古墳発掘調査報告書」(昭和61年)
- ⑧ 島根県教育委員会・丹羽野裕「島根県埋蔵文化財調査報告書第XVII集」(1992)
- ⑨ 島根県教育委員会・近藤 正「島根県埋蔵文化財調査報告書第I集」(昭和44年)

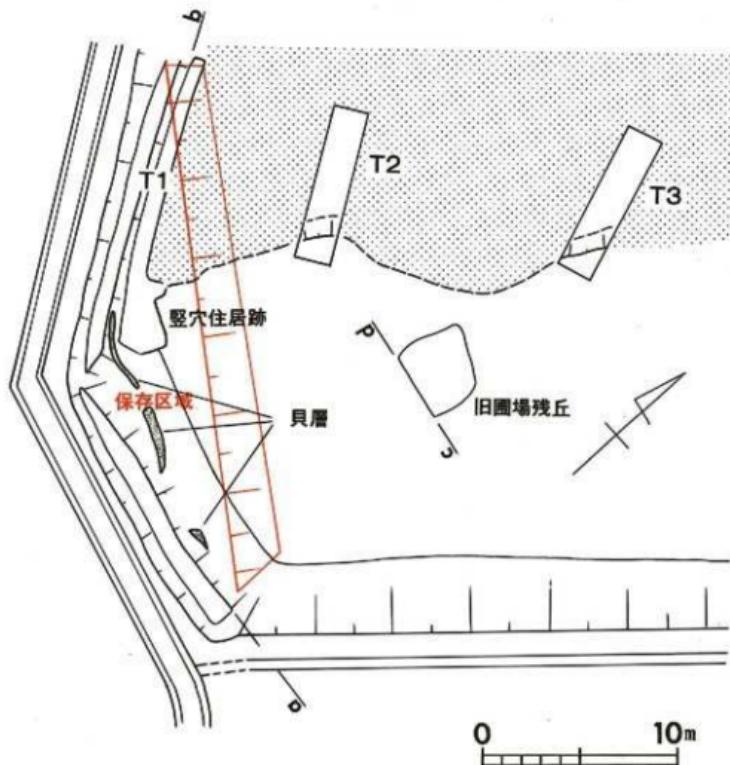


第2図 遺跡位置図 (1:6,000)

3. 御領田遺跡の調査

1. 調査の概要

御領田遺跡は、篠川郡湖陵町大字常楽寺185、215番地に所在し、神西湖に注ぐ常楽寺川右岸の丘陵裾部に位置する。遺跡は、県営圃場整備事業の工事中に貝塚が露出したことにより発見されたもので、発見時には既に造成工事がほぼ完了していたため、貝層は圃場法面を除けば完全に削り取られた状態であった。したがって、調査は貝層が表れていた圃場法面の記録の作成と、僅かに



第3図 調査区配置図

取り残されていた旧圃場残丘の発掘、また、地山が低くなり遺構・遺物が残存していることが予想された圃場北側に3本のトレンチを設定して遺跡の広がりを確認することとし、工事が及ばない部分については最小限の発掘に留めた。調査期間は、平成6年2月14日から3月3日の約半月である。

発掘範囲が狭かったため、遺跡の全容を窺うには到底至らなかったが、遺跡発見の端緒となった平安時代末から鎌倉時代に形成された貝塚をはじめ、その下層で縄文時代後期の遺物包含層や竪穴住居跡も検出された。いずれも、調査区内では最も西寄りの第1トレンチ及び工事で削り取られた圃場法面で確認されており、地形的にこの西側が張り出していることから、遺跡は工事が及んでいない西側へと、さらに広がっているものと考えられる。

なお、縄文時代後期の竪穴住居跡は、県内でもあまり検出例がないことから、圃場の設計変更を行って盛土保存することとした他、貝層の中央部については、長さ4m・幅1.5mにわたって貝層の剥ぎ取りを行っている。

2. 縄文時代の遺構と遺物

1) 遺構

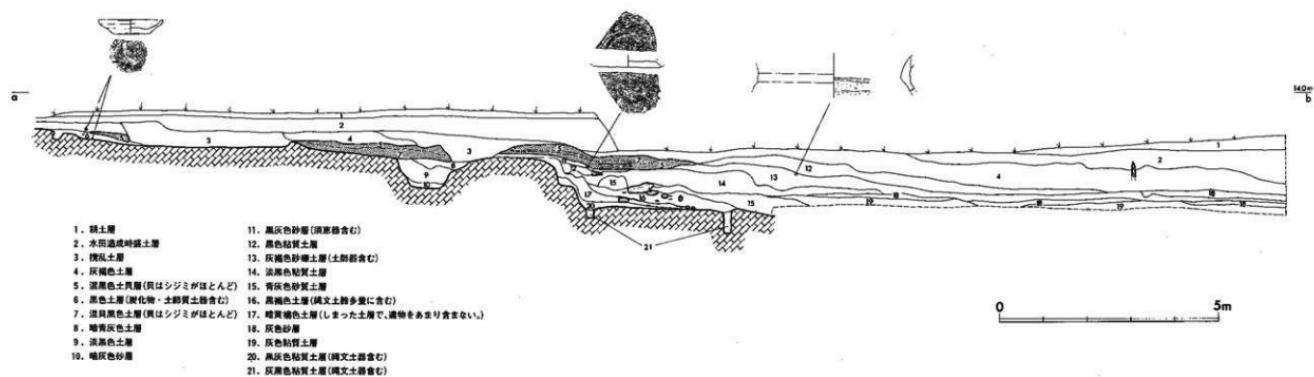
第1トレンチは、圃場西側の法面から地山が下がる部分を観察するために設定した調査区で、縄



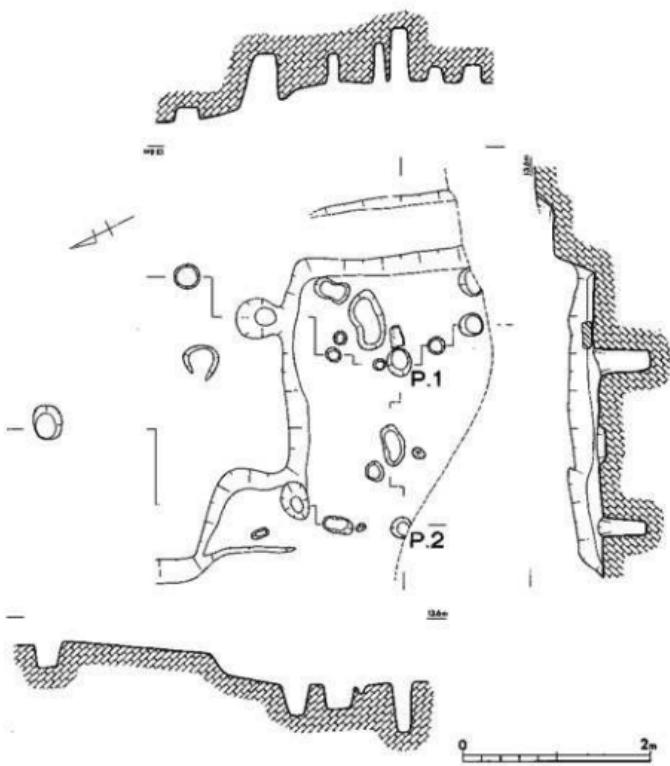
第4図 竪穴住居跡遺物出土状況実測図

文土器の包含層と竪穴住居跡は、この第1トレンチの南端、貝塚の北端部下層に位置する。

遺物包含層は、比較的堅硬で遺物を含まない暗黄褐色土層(17層)を挟んで2層あり、貝層からの深さが40cmのところにある黒褐色土層(16層)と、70cmのところにある黒灰色粘質土層(20層)がこれにあたる。遺物は、いずれも小片が多く、原位置を保つものは見られなかったが、多量の土器



第5図 園場法面及び第1トレンチ西壁土層実測図



第6図 積穴住居跡実測図

片をはじめ、磨製石斧・磨石・石皿などがみられた。

積穴住居跡は、調査区の制約上、約半分を発掘したにすぎないが、緩傾斜をもつ地山をL字形にしっかりと掘り込んだものである。調査時の周囲の状況は、水田になっていることもあって低湿地のようになっており、集落を想定することは困難であるようにも思われた。しかし、第1トレンチの中程より北側にかけては、縄文時代の遺物包含層の上にのる形で青灰色砂質土層・淡黒色粘質土層・灰色砂層・灰色粘質土層が交互に堆積しており、おそらく、川の流路か、その氾濫原にあたり、遺跡の所在する谷は往時はもっと深かったとみられる。したがって、この住居跡は本来低丘陵緩斜面に位置するものであったと考えられよう。

住居跡の平面形は、隅部が見られることから方形を呈しているものと考えられる。規模は、検出した範囲で、東西1.7m・南北3m余り・深さ50cmで、床面及び壁面付近には、多数のピットが認められるが、調査区の制約上、配置は十分に明らかになっていない。ただ、P. 1とP. 2は、住居跡北壁と平行に並んでおり、深さもあるので柱穴である可能性が高い。大きさは、P. 1が径25~30cm・深さ55~60cm、P. 2が径24cm・深さ45~48cmである。

出土遺物としては、床面やピット内で縄文土器片がみられた他、住居跡の周囲で黒曜石製石鎌及び剥片が検出されている。

2) 遺 物

縄文土器 土器は、その出土状況から遺物包含層である黒褐色土層で確認されたもの（第7~9図）と、堅穴住居跡の床面直上にあたる黒灰色粘質土層で検出されたもの（第10図）に分けることができる。

第7図1~6は、口縁部外面を肥厚させた深鉢である。3は無文であるが、1・2及び4~6にはR Lの縄文が施されており、5には1条の沈線もみられる。また、6は波状口縁になっている。調整は、1の内面に条痕文、4の内外面にミガキがみられる他は、ナデである。

7・8も、口縁部の外側を肥厚させたものであるが、縄文はみられず、2本の沈線がめぐるものである。調整は、内外面ともミガキである。

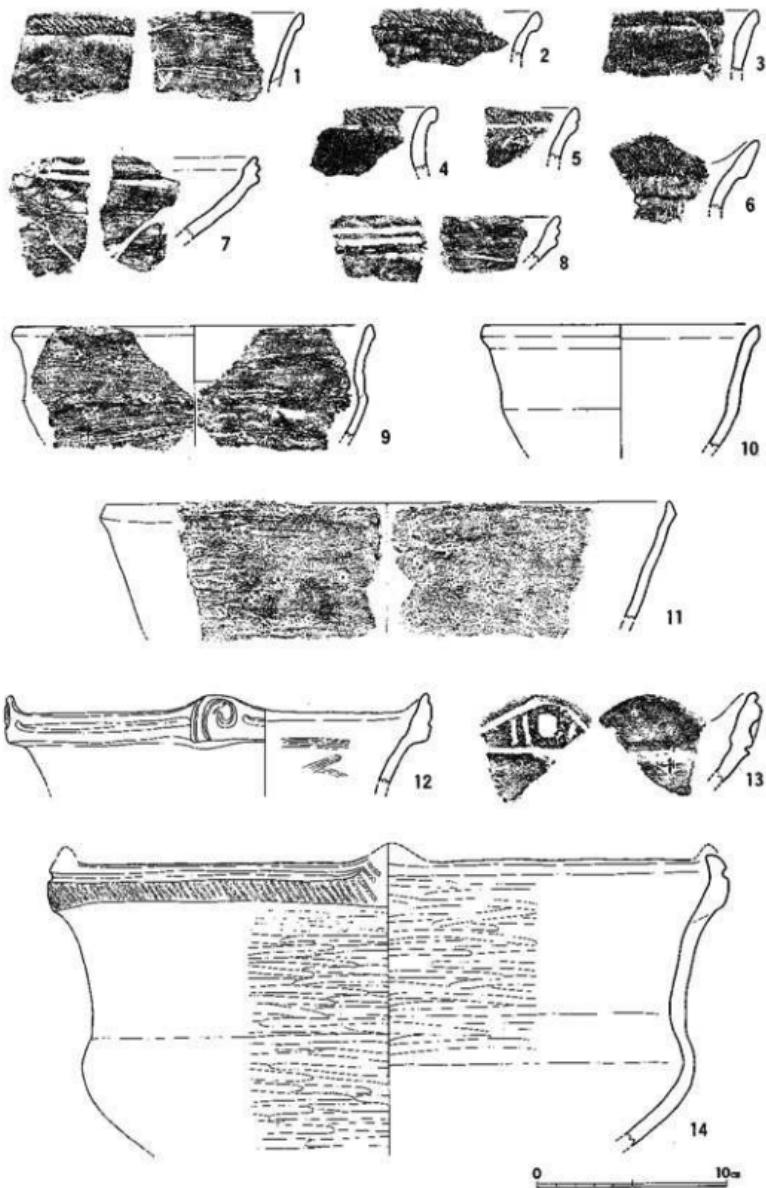
9~11は、口縁部外面に稜線をもつ深鉢である。9・10は胴部にも稜線がみられ、やや屈曲した器形をとる。調整は、10は不明であるが、他は内外面とも条痕文がみられる。

12~14は、口縁部が幅広く肥厚し、そこに沈線を主体とした文様をもつものである。12は、復元口径22.7cmで、波状口縁をもち、波頂部には渦状文、その左右に1条の沈線を施す。調整は外側は不明であるが、内面には条痕がみられる。13は、口縁内外面が肥厚し波状を呈するもので、波頂部には円文と短線、口唇に縄文が入るものである。調整は、内面にミガキがみられる。14は、口縁外面に1条の沈線とR Lの縄文が施されている。沈線が切れていることや口縁の一部が盛り上がりしていることから、口縁は波状を呈するものと思われる。胴部はよく張り、やや屈曲した形態をとっている。調整は、内外面ともミガキである。

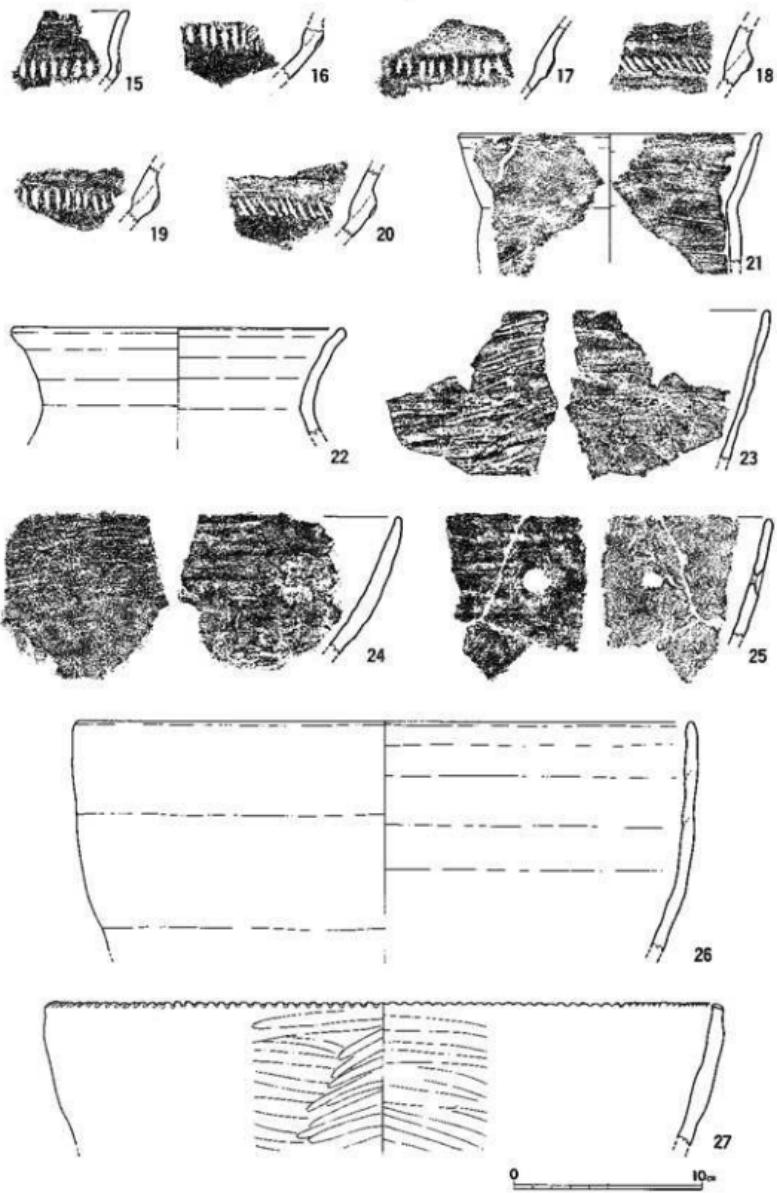
第8図15~20は、外反した体部の屈曲部外面に縦方向にまたは斜め方向に刻み目を施した浅鉢である。調整は、15の内外面にミガキがみられるが、他はナデである。

21・22は、単純な口縁が外反し、屈曲した器形をもつ深鉢である。調整は、21の内面に条痕、22の内外面にはナデが認められる。

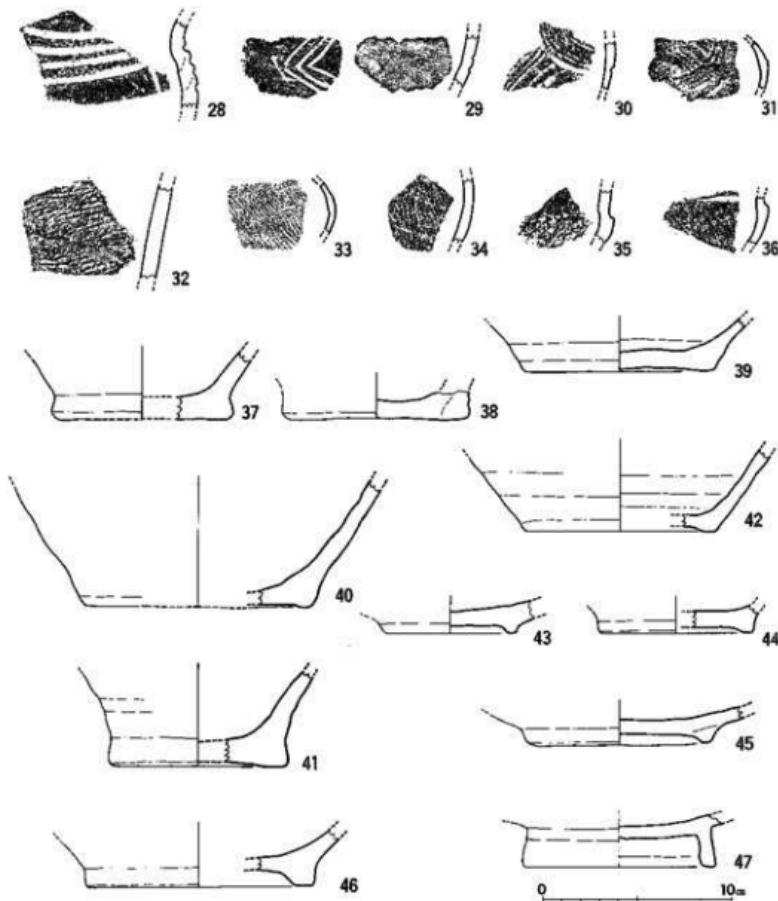
24・25は、丸みを帯びた体部を有する浅鉢と思われる。調整は、24が内外面とも粗い条痕、



第7図 第1トレンチ縄文土器実測図(1)



第8図 第1トレンチ縄文土器実測図(2)

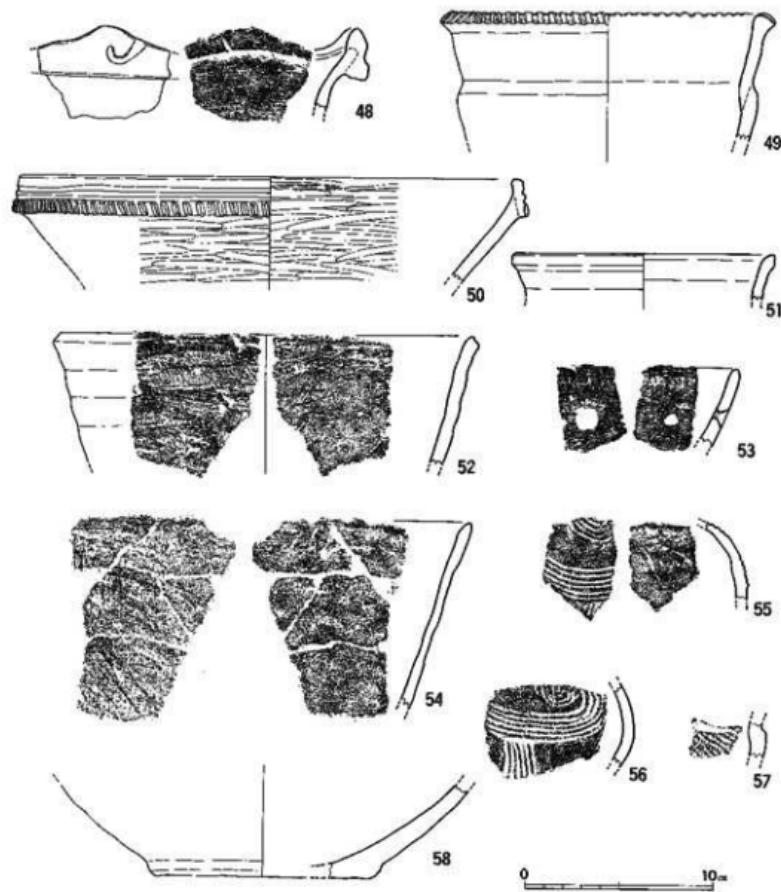


第9図 第1トレンチ縄文土器(3)

25の内面にはミガキがみられる。また、25には内側から焼成後穿孔された孔がある。

23・26・27は、やや内湾する体部を有する深鉢である。27は、口唇に大きな刻み目が入る。調整は、23の外面に条痕・内面にナデ、27の内外面が巻貝条痕である。

第9図28～31は、体部に沈線文をもつもので、30・31は、擗描き沈線文が入り組み文状に施されている。調整は、28がナデ、29がミガキと思われる。



第10図 第1トレンチ竪穴住居跡出土縄文土器実測図

32～36は、体部に縄文をもつものである。縄文は32・35がL、33・34・36がRで、35・36は外面に段を有する。内面の調整は、34～36にミガキがみられる。

37～47は、底部である。37・38は平底、39～42は上げ底で、43～47は高台状のつくりとなっている。調整は不明なものが多いが、43の内面には僅かにミガキがみられる。

第10図48・50は、口縁を幅広く肥厚させ、外面に文様をつけるものである。48は、波状

口縁を持ち波頂部に渦状の沈線文がみられる。50は、2条の沈線とその下に斜め方向の刻み目が施される。調整は、50が内外面とも巻貝条痕の後、ミガキが入る。

49・51は、口縁がやや肥厚し稜線をもつものである。49は、口唇に刻み目があり、脣部が屈曲する器形をとる。調整は巻貝条痕の後、ナデである。

52・54は、外傾する口縁をもつ深鉢である。52は口唇に稜線をもっており、調整はともに粗いナデである。

53は、口縁部に内面より焼成後に穿孔が行われているものである。内外面にミガキがみられることから、浅鉢かと思われる。

55・56は、6条1単位の櫛描き沈線文が弧状に施されているものである。調整は、56の内外面にミガキがみられる。

57は、外面にRの繩文と太い沈線をもつもので、内面にはナデがみられる。

58は、平底の底部で、内外面にミガキがみられる。

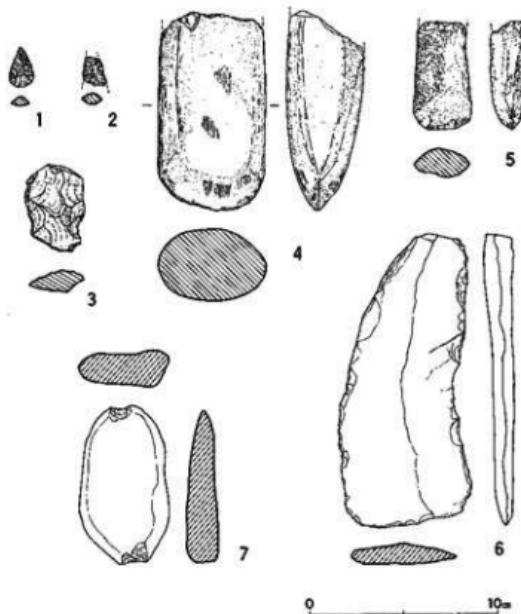
石器 第11図1・2

は、黒曜石製の石鏃である。1は、片面が扁平で基部が丸みを帯びていることから、未製品と思われる。2は、先端と基部を欠損しており、形状は不明である。

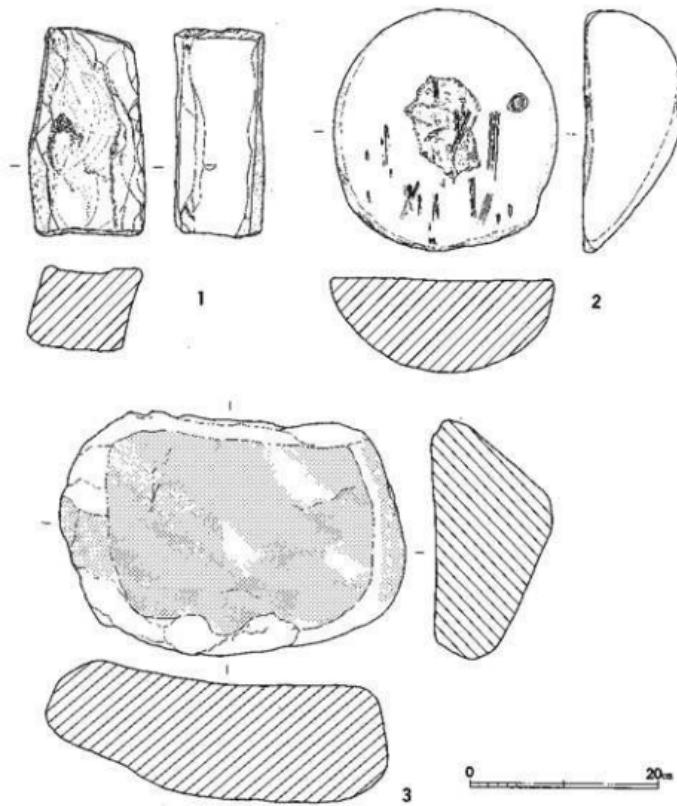
3は、めのうの剥片であるが、周縁に加工痕が認められる。

4・5は、磨製石斧である。ともに基部を欠損しているが、刃部は丁寧に磨かれている。

6は、安山岩製の打製石器で、石鏃の可能性がある。端部にやや磨滅した使用痕がある他、もう



第11図 石器類実測図



第12図 石皿類実測図

一方には剥離前の自然面が残っているが、他の類例を待ちたい。

7は、石鍤である。鍤の両端を打ち欠いただけの簡単なものである。

第12図1～3は石皿類で、1・2は第1トレンチの竪穴住居床面で検出されたものである。

1は、方柱状を呈するもので、各面に使用痕が認められる。2は、半球状で平な面が、良く使われている。3は、平な石の上面及び側面の一部を使用したものである。

3. 繩文時代以降の遺構と遺物

1) 遺構

御領田遺跡からは、土師器・須恵器・土師質土器など縄文時代以降の遺物が検出されており、断続的ながら引き続き人々の生活が営まれていたことが窺える。圃場整備工事の際には、柱根が採集されていることから、この頃の遺構も存在したと思われるが、調査時にはすべて削平されており、残存する遺構は、僅かに遺跡発見の端緒となった貝塚が圃場の法面に露出していた程度であった。

貝塚は、途中2カ所で後世の攪乱を受けているが、復元すれば長さ13mほどであったものと推定され、厚さは厚いところで30~40cmである。南より北にかけて緩やかに傾斜をもちながら形成されており、南端と北端では90cmの高低差がある。貝層の東側への広がりについては、工事によって既に削り取られていたため不明であるが、東13mのところに僅かに残った造成の及ばなかった地点（旧圃場残丘）では確認されておらず、この間にその縁辺部があったものと思われる。西側への広がりは、調査区外であるので不明であるが、隣接する水路の工事を行った際にも貝が出土したといい、地形的に見て調査地点より西側にさらに貝塚が続いているものと思われる。

貝層は、ほとんどがシジミよりなっているが、一部にハマグリも含まれており、猪の頭骨や鹿角の加工品などもみられた。貝層は貝の密度により混黒色土貝層・混貝黑色土層に分けられ、南側で1層、中央部で2層、北側で3層よりなる。貝層及び貝層直下の土層からは、土師質土器・瓦質土器・須恵器が出土しており、貝塚の時期はこれらの遺物と同時期か、それ以降であったと思われる。

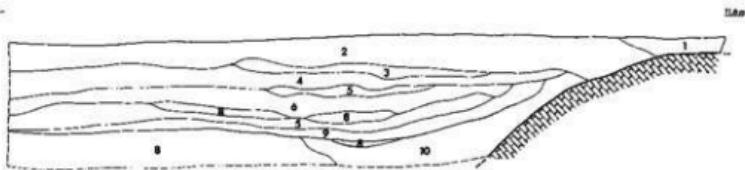
また、貝塚の中央部下層からは、地山に掘り込まれた幅1.6m・深さ70cmの溝が検出された。溝の断面形は、底部の平坦な逆台形を呈し、底面に暗灰色砂層の堆積が認められたことから、水路のようなものであったと思われる。埋土中からは、土師質土器が検出されており、貝塚には先行するものの比較的近い時期に営まれたものと考えられる。

旧圃場残丘は、古い電柱があった関係で、工事が及ばなかった地点である。水田の盛土と考えられる部分を除けば、5層よりなっており、上層の暗灰色土層(2層)に貝塚とほぼ同じ頃のものとみられる土師質土器・黒色土層(3層)に奈良時代の須恵器が含まれていた。灰色土層(4層)には、上層より打ち込まれた杭もみられたが、調査範囲が限られていたことなどもあって遺構は明らかにできなかった。

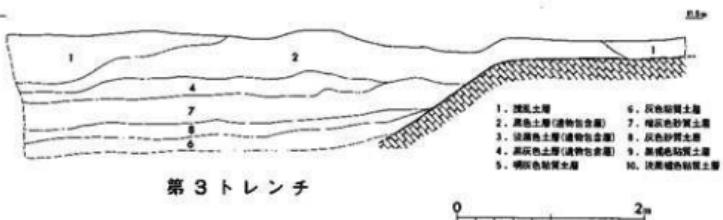
第2・第3トレチは、遺跡の範囲を確認するために、圃場北側に設定したものである。いづれ



第13図 旧圃場残丘土層実測図



第2トレンチ



第3トレンチ

第14図 第2及び第3トレンチ実測図

も南側は削平を受け、北側に急激に落ち込む地山面を確認した。土層は、上層の黒色土層(2層)・淡黒色土層(3層)・黒灰色土層(4層)に土師質土器片などが含まれていたが、下層には灰色砂質土層(8層)・灰色粘質土層(6層)・黒褐色粘質土層(9層)などの灰色または黒色系の砂層と粘質土層が交互に堆積しており、遺物もほとんどみられなかった。おそらく、第1トレンチ中程より北側の状況と同様に、川の流路か、その氾濫原になっていたものと思われる。

なお、調査中、降雨によって第3トレンチの壁面が崩落した際、流れ込みと見られる下駄が1点出土している。

2) 遺 物

土師器 第15図1は、複合口縁をもつ壺で口唇に面をもつ。調整は、外面に横ナデがみられる。

2は、外反する口縁をもつ壺で、口唇に平坦面をもつ。調整は、内外面とも横ナデである。

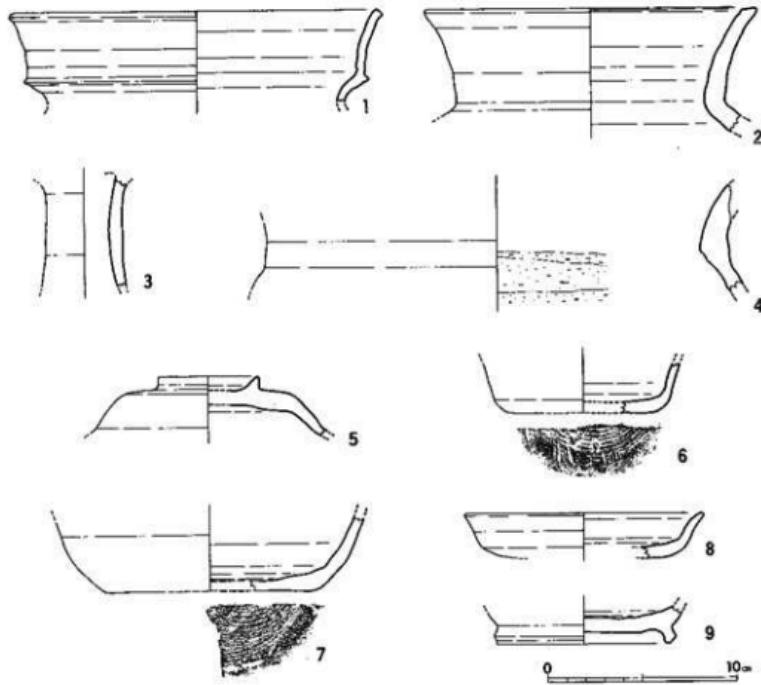
3は、高壺の脚部である。

4は、口縁が緩く外反する壺の肩部である。調整は、内面頸部以下にヘラケズリがみられ、他は横ナデである。なお、外面にはススが付着している。

須恵器 5は、輪状つまみを有する壺蓋である。

6・8は、無高台の壺身である。6は、比較的深いもので、底部は回転糸切り後、未調整である。

8は、口縁が外反し浅いもので、底部は回転糸切り後、未調整である。



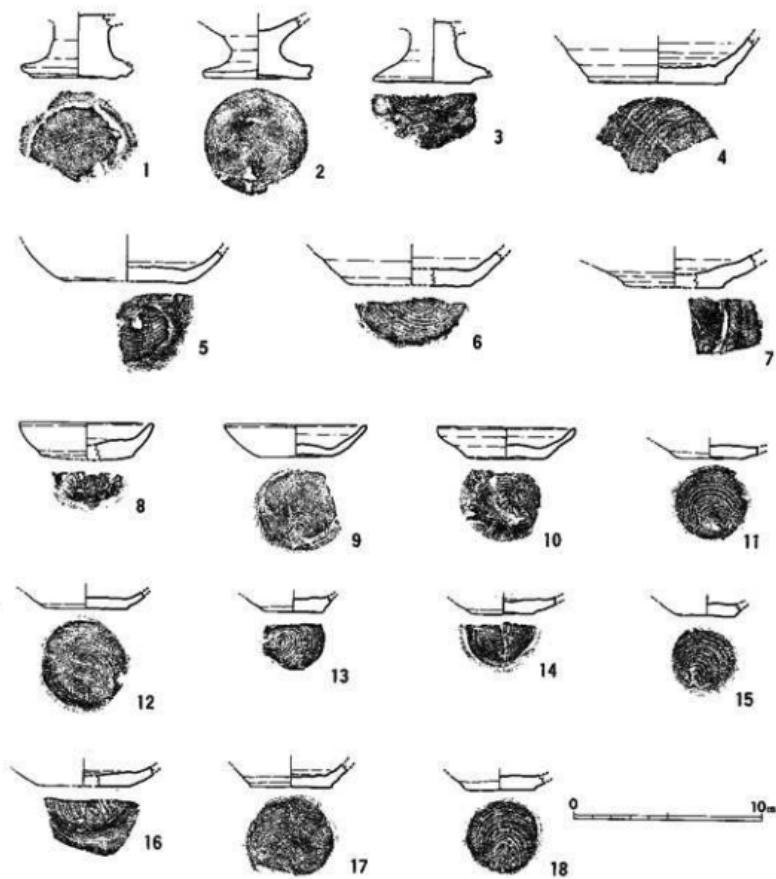
第15図 土師器・須恵器実測図

7・9は底部である。7は、高台をもたないもので、復元底径は11cmと大きく、体部は丸みがある。底部外面は回転糸切り後未調整で、内面にはナデがみられる。体部外面には、色調差があり、重ね焼きが行われたものと思われる。9は、高台を有するもので、壺の底部になるものとみられる。調整は、底部内面にナデがあるが、その他は底部外面を含め回転ナデである。

土師質土器 第16図1～3は、脚付きの壺である。いづれも高環状の形を呈し、壺部は浅く皿状になるもの1・3と、深いもの2がある。底部は、回転糸切り後未調整で、その他は回転ナデがみられる。なお、1の壺部内面は、黒色を呈している。

4～7は、底径が5.4～7.3cmと比較的大きい無高台の壺である。底部は、回転糸切り後未調整で、その他は回転ナデがみられる。

8～10は、無高台の壺であるが、口径7.2～7.6cm、底径3.9～4.8cmと小さく、器高も1.7～2.0cmと低いものである。底部は、回転糸切り後未調整で、その他は回転ナデがみられる。

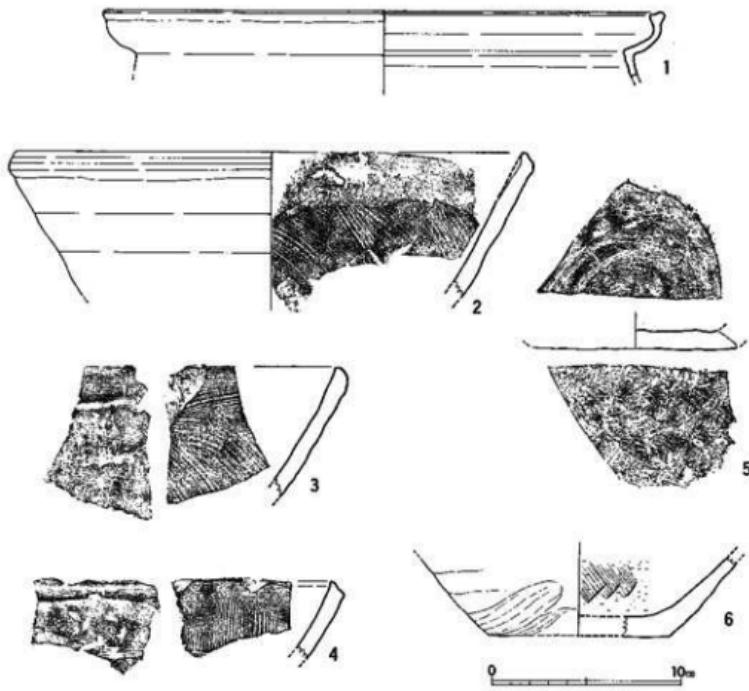


第16図 土師質土器実測図

11～18も無高台の坏で、8～10と同様に底径が小さいものである。底部は、回転糸切り後未調整で、その他は回転ナデがみられる。

瓦質土器 第17図1は、土鍋とみられ、屈曲し丸みを帯びた口縁をもつ。調整は内外面とも回転ナデである。

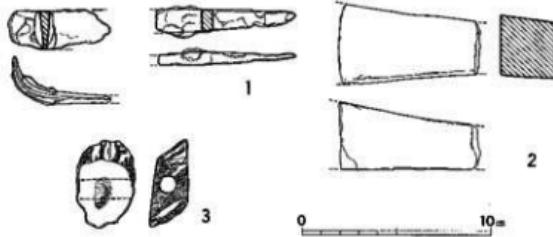
2～4は、摺鉢の口縁部である。口縁は丸みをもつもの2・3と、稜をもつもの4があり、内面



第17図 瓦質土器実測図

にハケメ状の摺り目、外面
には粗いナデがみられる。

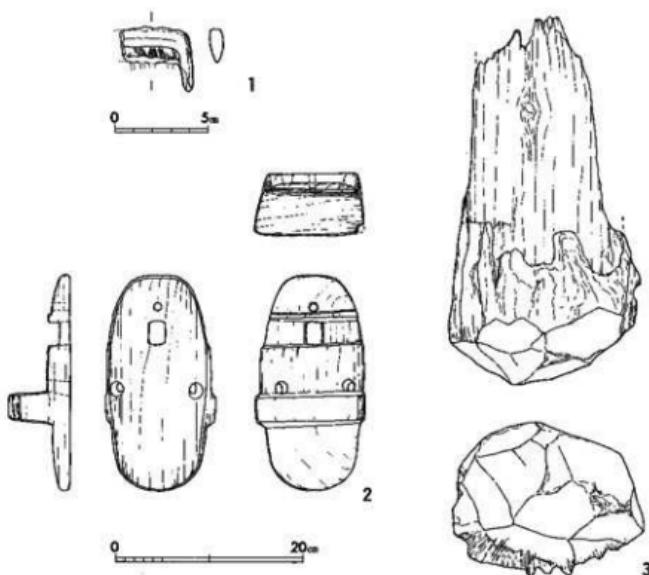
5・6は、底部である。
5は、外面に指頭圧痕、内
面はナデである。6は、摺
鉢で、ハケメ状の摺り目が
あるが、回転する使用痕に
よって磨滅している。外面
粗いナデである。



第18図 鉄製品他実測図

刀子 第18図1は、切先と茎の部分が遺存するものである。切先は、大きく曲がっているが幅
2.1cm・厚さ5mm、茎は闊は見られず、幅1.2cm・厚さ6mmである。

砥石 2は、両端が欠損しているが、四面ともよく使い込まれている。



第19図 木製品実測図

鹿角製品 3は、鹿角を斜めに輪切りにしたもので、長さ4.6cm・幅3.0cm・厚さ1.6~1.9cmである。鹿角を横断するように径8mmの穴が穿たれており、よく磨かれて光沢がある。

木製品 第19図1は、櫛である。欠損品であるため全形は不明であるが、高さ3.5cm・厚さ7mm・歯長1.5cmである。

2は、下駄で、板目にとられたものである。大きさは長さ23cm・幅11cm・高さ6.5cmで、歯は後は削り出されているが、前はホゾ穴を設けて差し込むようになっている。鼻緒は、やや左によって付けられており、右足用であったと考えられる。

3は、柱根で、残存長39cm・径20~16.5cmを測る。端部には粗い切断痕が認められる。

4. まとめ

今回の発掘調査は、工事中に遺跡が発見されたため応急処置として行ったもので、遺跡の実態を明らかにするという点では極めて不十分なものにならざるを得なかった。しかし、遺跡発見の契機となった貝塚が古代末から中世に営まれたものであることが判明した他、下層より縄文時代後期の遺物包含層と竪穴住居跡1棟を検出することができた。また、遺構は残っていなかったものの、古墳時代前期の土師器や奈良時代の須恵器なども出土していることから、縄文時代後期から中世に至るまで断続的に集落が営まれていることも明らかになった。ここでは、この中で注目される縄文時代の遺構・遺物と、古代末から中世の貝塚について若干の位置付けを行ってまとめたい。

御領田遺跡は、神西湖に注ぐ常楽寺川が開削した小さな谷合に所在する。縄文時代後期の住居跡検出地点の標高は12m前後と比較的高く、現在の谷は川の堆積物によってかなり埋まっていることが想定されることから、往時は丘陵裾部の緩斜面に営まれた集落であったと考えられる。現在、出雲平野周辺で知られている縄文時代後期・晚期の遺跡は、湖陵町三部竹崎遺跡、出雲市三田谷遺跡・矢野遺跡、大社町原山遺跡・出雲大社境内遺跡が上げられるが、いづれも大社湾沿岸の砂州によって日本海と隔てられた潟湖（のちの「神門水海」、現在の神西湖）の周辺部に位置するもので、砂丘や自然堤防といった微高地に集落が形成されており、御領田遺跡とは立地を異にしている。この地域では、丘陵裾部に立地する縄文時代の遺跡は、隣接する湖陵町奥ノ谷遺跡で僅かに知られている程度であり、今後こうした立地をとる遺跡があることも注意しておく必要がある。

竪穴住居跡は、調査範囲の関係で全形を明らかにすることはできなかったが、隅部がみられるところから、方形を呈するものであったと考えられ、時期は後述するように縄文時代後期中葉のものと見られる。⁽¹⁾ 縄文時代の竪穴住居跡は、県内では邑智郡瑞穂町堀田上遺跡で早期の円形住居跡2棟を確認しているが、他には検出されていない。方形のものは鳥取県では数例あり、東伯郡東伯町の森藤第2遺跡で隅丸方形のものが2棟、倉吉市津田峰遺跡で正方形のもの1棟が確認されている。時期は、前者が後期前葉から中葉、後者が後期前葉で、後期中葉の御領田遺跡と近い頃のものである。

縄文土器は、竪穴住居跡の覆土中より多量に検出されたが、その出土状況を見ると、廃棄された住居跡の中に土器が投棄された様子を示していると思われる。遺物包含層は、比較的堅く遺物を含まない暗黄褐色土層を挟んで、上層の黒褐色土層と、下層で住居跡床面直上の黒灰色粘質土層に分けられる。上層より検出されたもののうち、有文深鉢の縁帶文土器は第7図12～14にみられるように、いづれも口縁部の外側が肥厚し、内面が肥厚するものが見られないのが特徴である。また、浅鉢は第8図15～20のように外反した体部の屈曲部に刻み目を施すものが見られる。これらは、⁽²⁾ 香川県永井遺跡の縄文土器編年によれば、永井I式に含まれるもので、縄文時代後期中葉の津雲A式に併行するものとされている。さらに、第7図1～6は口縁部外側が玉縁状に肥厚し縄文が施さ

れているもので、永井Ⅱ～IV式に含まれ、津雲A式に後続する彦崎K I式に併行するものと考えられる。これに対し、下層より検出されたものは、第10図50のように肥厚する口縁部外面に沈線と刺突文が施されたものを含んでおり、津雲A式に先行する成立期縁帶文土器に属する可能性が考えられる。⁽⁴⁾ 繩文時代後期中葉の縁帶文土器は、山陰では綺ヶ鼻式土器と呼ばれているが、御領田遺跡で検出された土器群は、その成立段階に位置づけられるものと思われる。

遺跡発見の端緒となった貝塚は、貝層の下から土師質土器や瓦質土器が出土したことから、これらと同時かそれ以降に形成されたものと思われる。土師質土器は、第16図1～3のように高环状を呈する脚付きの壺を伴うのが特色である。この種のものは、松江市石台遺跡・中竹矢遺跡IV区・天満谷遺跡などで出土しており、主として12世紀代に位置づけられている。⁽⁵⁾ また、瓦質土器は、第17図2～6のような鉢が、出雲市矢野遺跡第2地点で検出されている。これらのことからすると、貝塚の時期は平安時代の終り頃から鎌倉時代の初めにかけて営まれたものと見られる。

貝層については、調査を行っていないが、貝の種類はハマグリを少し含むものの、その殆どが汽水産のシジミであり、これらは御領田遺跡から北に2km離れた神西湖で採られたものと思われる。現在の神西湖は、平安時代の終り頃から鎌倉時代の初めにかけては、まだ北東に広い水域を持っていたと見られるが、その周辺にある出雲市西園町の上長浜貝塚でもこの頃の貝塚が知られており、こうした集落が湖を取り巻くようにあったことを窺うことができる。

以上、今回の発掘調査は部分的なものであったにもかかわらず、多くの成果を上げることができたが、地形的に見ると、この調査地点は御領田遺跡の縁辺部にすぎないものと思われる。調査区の西側にあたる丘陵斜面は、現況では道路や宅地・畠地などになっているが、遺構の深さからみてまだ良好に遺跡が残っていることが想定され、遺跡の保護が図られていくことが望まれる。

註

- (1) 島根県教育委員会『主要地方道浜田八重可部線特殊改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』
1991
- (2) 東伯町教育委員会『藤森第1・第2遺跡発掘調査報告書』 1987
- (3) 香川県教育委員会『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告』第9冊 1990
- (4) 千葉 豊「西日本縄文後期土器の二三の問題」『古代吉備』第14集 1992
- (5) 広江耕史「島根県における中世土器について」『松江考古』第8号 1992
- (6) 出雲市教育委員会『矢野遺跡第2地点発掘調査報告書』 1991

4. 三部竹崎遺跡採集の遺物

(1) 遺跡の概要

平成4年度に神西湖南岸、江南駅北側で開始された神南地区県営圃場整備事業は、平成5年度には常楽寺川流域の第2工区、および第3工区（湖陵町の東端部）へ移行した。

三部竹崎遺跡は、神西湖に注ぐ常楽寺川を南へ約1.2km通った東岸平野部に存在し、湖陵町内のみの遺跡範囲は、およそ300m×150m、約42,000m²という広さをもつ。出雲市域の部分を合わせると、約60,000m²になると思われ、県内では最大規模の遺跡といえるであろう。標高は、圃場整備前水田面で南側が5.4～5.9m、北側は4.2～4.5mを測る。

しかしながら、当遺跡は周知の遺跡ではなく、「調査に至る経緯」で述べているように、工事中に遺物が採集されて、その存在が明確になったものである。湖陵町教育委員会は工事を中止させたものの、その時点では、ほぼ完全に工事を終了した時であった。その削平は南側で深さ約1mにもおよび、後述するように遺構面を剥ぎ取られたと考えられる。北側は圃場整備の平坦化という性質上、盛土がなされているが、深さ2mにもおよぶ排水溝が設けられたため、その掘削土内からかなりの量の遺物が発見された。

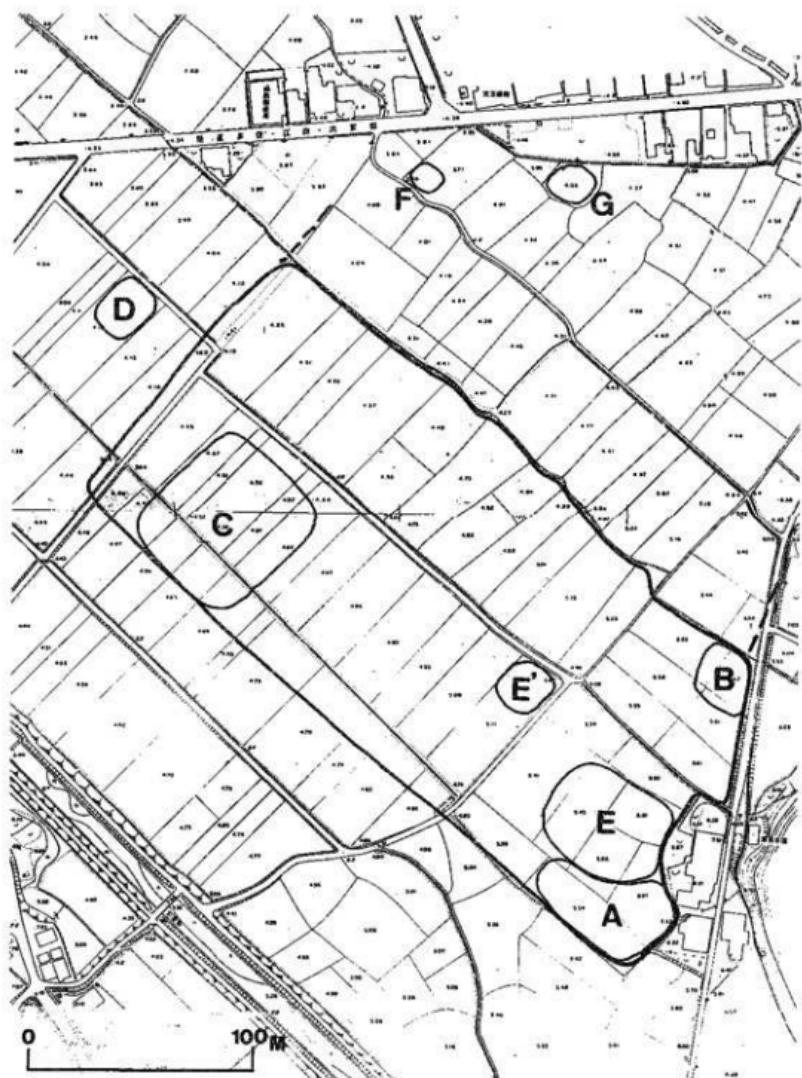
このように広大な遺跡ではあるが、散布状況でみると地点によって微妙な差が見えてくる。

第20図は、遺物の散布状況図で、これに示されているA～Gの地点が主な採集地である。A地点は、当遺跡中一番高所にあたり、山からの斜面がなだらかに続く場所である。遺物は縄文土器や陶磁器、土師質土器など様々なものが混在するが、顯著なのは古墳時代前期の土師器がこの地点以外から発見されることである。遺物を包含していた層は、真砂のような砂質土で、E地点を境に明瞭に土質差が認められた。

B地点は、標高5.6mの水田面であるが、遺物は北側と東側に設けられた排水路の掘削土内から検出された。縄文土器を主とし、特に晩期の突帯文土器はこの地点以外にはみられない。包含層は特別にきれいな砂で、水洗作業が非常に楽であった。これはB地点の南東にある谷との関係が考慮される。

E地点およびE'地点は、石器、特に石鎚の散乱が著しい所で、A地点と隣接しているにもかかわらず、その様相の差には目を見張るものがあった。A地点との境には、黒色粘土層がヘドロ状にたまっている箇所があったが、E地点のほとんどは黒褐色粘質土のようであった。また、土器がきわめて少ないと、徑30cmくらいの礫石のような石が等間隔に4つ並んでいたことも注意される。

以上、南側はかなり削平されており、遺物の発見状況などからも遺構面を切っているように思わ



第20図 三部竹峰遺跡散布状況図 (1:2500)

れるが、その下に残っている可能性も高いと考えられる。

北側の状況に転じると、まずC地点では排水溝の設定により、掘削された土内から弥生時代前期の土器、磨製石器が大量に発見された。表土（耕作土）のみを削平したと思われるが、その表面には径50～60cmの円形の落ち込みが1間×2間、計6個規則的に並んでいた。そこからは弥生土器の底部がかなり見つかり、周辺には磨製石斧が散布していた。また、掘った排水溝の断面にU字形の落ち込みを確認し、その下に遺構が存在することを示唆している。さらに、鋸歯文のある板（第32図4）をはじめ、木製品も大量に出土した。

D地点は遺跡範囲外であるが、C地点方面から運ばれた削平土が積み上げられていた箇所である。ここからは、文様のある弥生土器片（第22図5、第23図11）2片を採集している。

これ以外に、須恵器、土師質土器、陶磁器などはほぼ全域にわたって散布しており、古い水田の痕跡（杭列や柵列）も遺存していた。

ところで、上記は湖陵町側のみの概要であるが、遺跡の広がりは出雲市側へも及んでいるようである。F地点からは完形の打製石斧を筆頭に縄文土器数片を採集した。G地点からは突帯文をもつ縄文土器（第21図11）を採集し、その南側湖陵町境にわたり、弥生土器などが採集された。そして、県道（旧国道）を越えた北側水田面では全く遺物が認められず、常楽寺川脇も僅かしか発見できなかった。

以上のように、約60,000㎡の広さをもつ三部竹崎遺跡は、各地点によって様相が異なり、興味深い点多いが、発掘調査などをしていないので明言できない面も否定できない。

さて、最近確認されたことを付記しておくと、第2図「遺跡位置図」のH地点から古墳時代前期から中期の土師器が大量に発見され、I地点から須恵器が採集できた。三部竹崎遺跡のA地点との関連を想起せざるにはおれない事項である。

(2) 遺物の概要

縄文土器

縄文土器は第20図B、G地点で採集されたもので、A地点で若干の散布が見られたが、それ以外では皆無であった。第21図1は直立する胴部から上半で外反し、口縁端部に貼付突帯をもつ深鉢で、突带上に刻目を施すものである。1～2mmの長石、石英、砂粒を多量に含み、調整は条痕後、雜にナデている。色調は、にぶい黄橙色だが、内面は炭化物の付着により黒色である。推定口径18.1cm。2は平坦な口唇部をもち、胴部上半で屈曲する深鉢と思われ、内外面ともに口縁部はヨコナデ、胴部はヘラミガキが施されている。口径は28.7cmで、長石、石英、砂粒、雲母微粒を多量に含んでいる。灰白色を呈するが、内面の一部は黒色である。

3～8は深鉢の口縁部と思われる。3～5は口縁部が三角形断面を呈し、内湾ぎみに立ち上がるもので、灰褐色を呈し、いずれも砂粒、雲母微粒を含んでいる。3は条痕後ナデが、4はナデ、5は内面をミガキで調整する。6も内面をミガキ、外面をナデ調整。口縁端部はやや平坦である。やはり雲母微粒を含む。7は口縁端部が平坦で、口縁内面に段を作出、その下部にも同様に段を作り出している。明灰褐色を呈し、焼成は良好、長石粒、砂粒を多量に含み、雲母微粒も少量含んでいる。内外面ともにミガキぎみにナデをしている。8は口縁下部に2つの円孔をもつ深鉢と思われる土器で、条痕後ナデを施している。やはり雲母微粒を含み、色調は明灰褐色を呈している。

9・10は胴部片で、途中屈曲点をもつものである。いずれも内外面をミガキ調整し、砂粒・雲母粒を多量に含んでいる。

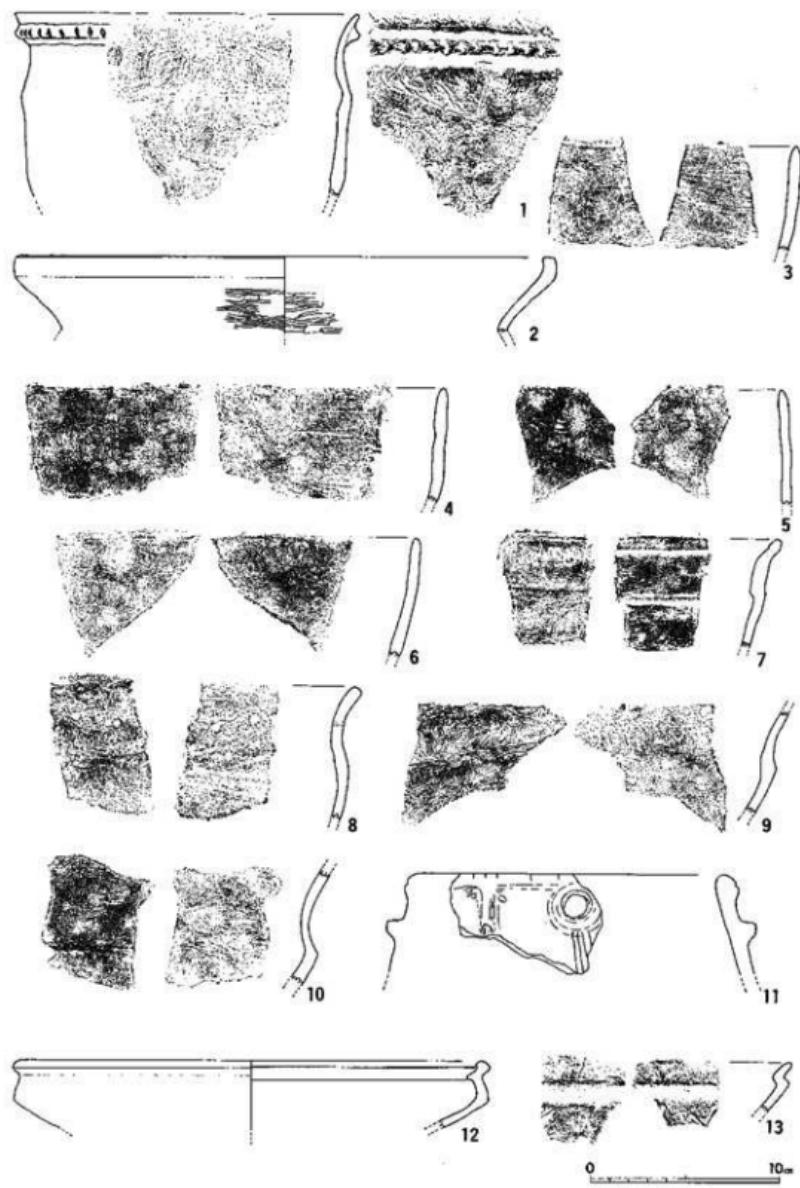
11はG地点の出土で、口縁部が内側に内湾する推定口径16.3cmの深鉢である。口縁端部外面を肥厚させ、そこに細かい刻目文を施す。その下面に輪状の浮文を形成し、下に4条の細沈線を入れる。また、端部突帯から縦に突帯を3cmほど延ばし、止めている。その脇両側に浅い刺突文を入れている。内面はナデを施しているよう、胎土は長石粒、砂粒を多量に含み、内外面ともに黒褐色を呈している。

12・13は浅鉢で、12は外側に平坦面をもつ口縁部で外へ屈曲し、すぐ内側へ強く内湾し、内面に隆起面をもつ。外面は不明だが、内面はミガキを施しており、浅黄色、オリーブ黒色を呈する。胎土は長石粒、石英粒、砂粒などを多量に含んでいる。13はS字状に強く屈曲する口縁部をもち、内外面をナデ調整しているようであるが、風化が著しく、明言できない。長石粒を多量に、ほかに砂粒を含み、明灰褐色を呈している。

以上の土器のうち、突帯文土器は晩期後半、3～6は縄文時代後半期に通有のもので、2・12・¹³13は晩期前半にあたるものと思われる。

弥生土器

弥生土器は当遺跡中最も採集できた遺物で、C地点を中心とする位置から採集した。第22図1～5は壺形土器で、器形の全体を把握できるものはなかった。1は口径15.3cm、やや強く外反する頸部をもち、口唇部を突出ぎみに形成するもので、端部外面に刺突文、頸部下半にヘラ状工具による7条の沈線文を施す。口縁部はヨコナデ、頸部は6～7本を1単位とする刷毛目を縦位に施した後に、沈線文を入れる。胴部はミガキがなされている。2は口径20.2cm、ゆるやかに大きく外反する口縁部で、頸部にヘラ状工具による1条の沈線文、その下に同工具の先端を使った刺突文を施す。口唇部は面取りぎみにナデ調整し、外面はミガキを施す。1・2ともに内面は草根などで摩耗し、調整は全く不明である。3はやや厚めの器壁をもつ肩部で、ヘラ状工具による7条の沈線文を施している。同地点でまとまって採集した胎土、色調が同じ土器は胴部最大幅付近に貼付突帯し、刻目



第21図 縄文土器実測図

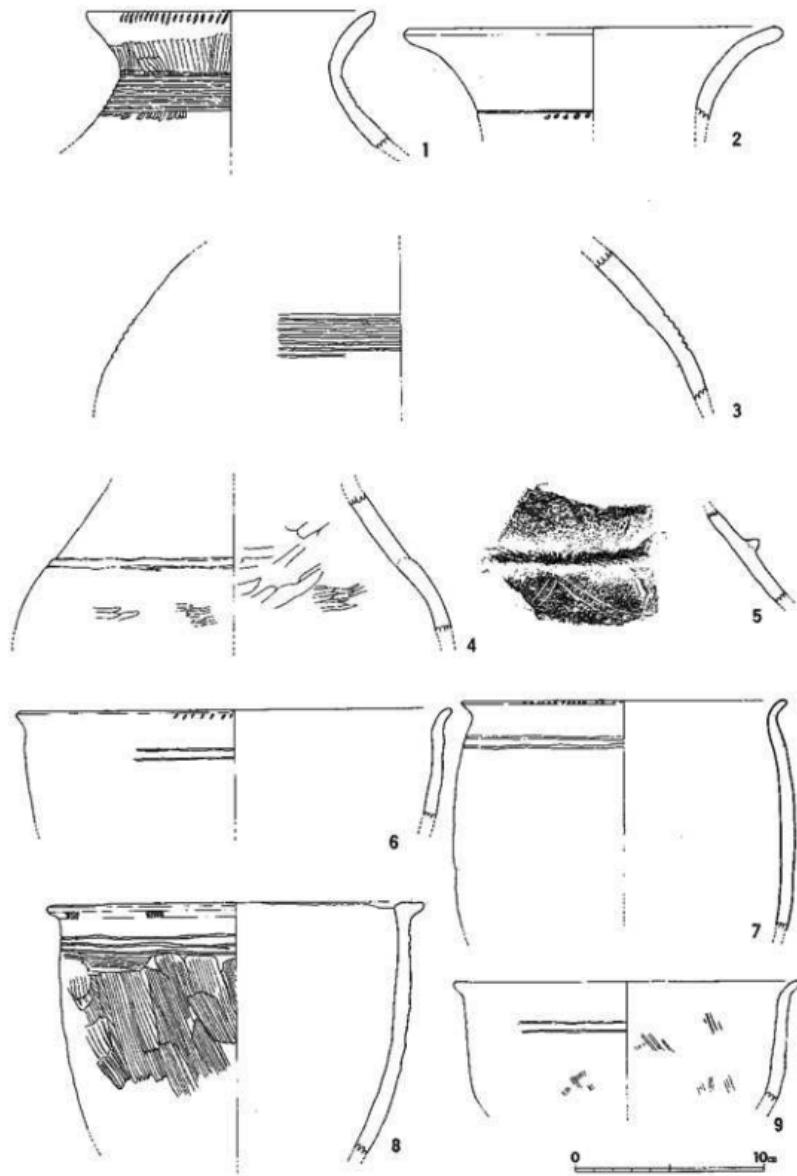
をもつものがあった。4は内外面ともに横位のミガキで、肩部に削り出しによる段を作出するものである。^{註3}巻き上げ痕が明瞭に観察でき、その痕を段にし、浅い沈線を2条入れている。5も肩部に当たると思われ、高い貼付突帯を付けたその下面に連弧文を配している。突帯を張り付ける前に溝を入れているように見え、注意すべき点である。^{註4}

6～9は壺である。6は口径22.9cm、口縁部で小さく外反するもので、端部外面に刺突文、頸部に2条の沈線文がなされている。内面はナデ、口縁部外面はヨコナデし、胴部はミガキと思われる。9は6同様のフォルムで、推定口径18.2cmを測り、頸部にヘラ状工具による2条の沈線文をもつ。胴部と内面は縦位の刷毛目がなされている。7は推定口径17.1cm、最大幅18.2cmを測る。やはり口縁端部外面に刺突文、頸部に2条の沈線文をもつ。8は口縁部で鋭く逆L字状に屈曲し、上面を平坦にするもので、口縁部以下を縦位の刷毛目で施した後、口縁部はナデ調整、頸部にヘラ状工具による浅く、雑な3条の沈線文を入れる。口径は19.5cmを測るものと推察される。

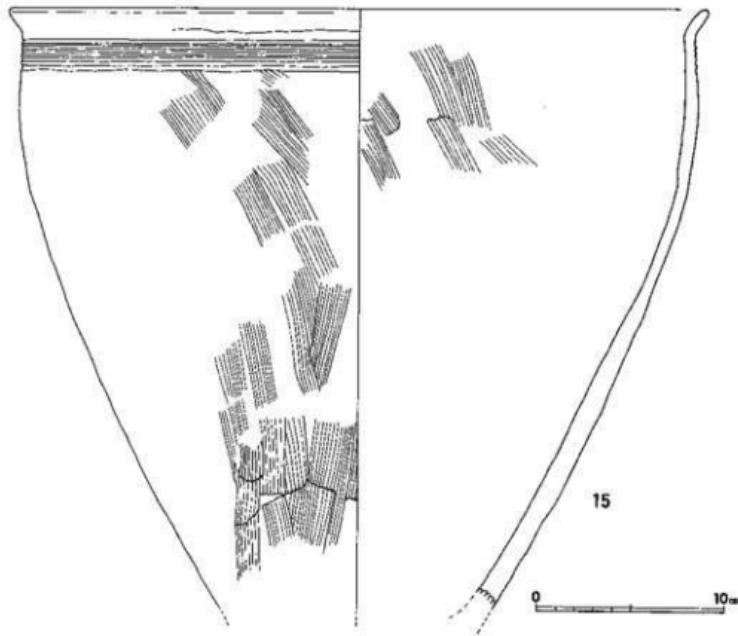
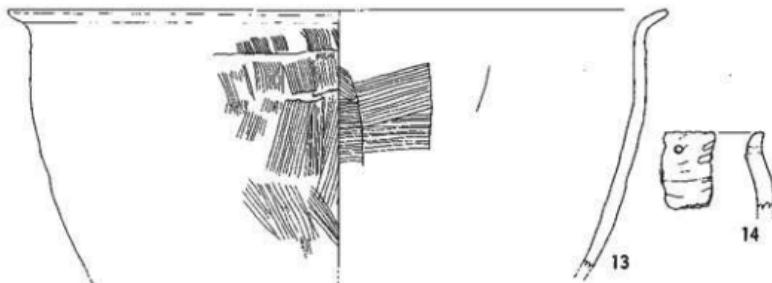
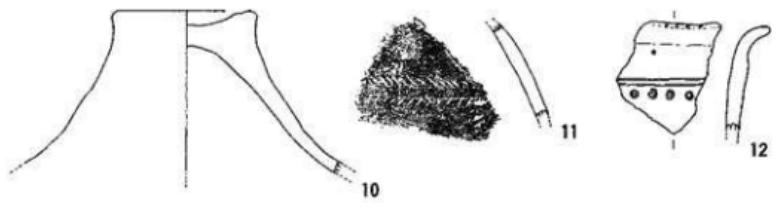
第23図10は蓋で、天井部径は7.5～8.2cmである。外面を凹状にし、端部に向けてゆるやかに外反させているが、摩耗が激しく、調整は不明である。11は壺の肩部に当たると思われ、5とともにD地点から採集したものである。0.6cm間隔で2条の沈線を入れ、その上下面に羽状に沈線を入れている。この続きと思われる破片が計3片見付かっている。

12は壺の口縁部で、端部外面に刺突文、頸部に2条の沈線文、その下に円形竹管文を配している。口縁下部にも小さな竹管文が認められる。13～第24図16はいずれも壺で、浅黄色かにぶい黄橙色を呈し、外面に炭化物の付着が見える。13は内面を横位、外面縦位の1単位10～15本の刷毛目調整を施すもので、頸部には刷毛目によって段を作出している。口径は35.0cmと推定される。14は口縁部に径0.35cmの孔をもち、外面は横位のヘラミガキがなされるものである。胎土は砂粒を含むが、その他の弥生土器と比較して少量で、やや特殊な面をもつ土器片である。15は口径37.0cmを測る内外面ともに縦位の刷毛目（1単位7～10本）を施すもので、口縁部へゆるやかに外反する器形である。頸部に5条の沈線文をもっている。16は口径44.6cmを測る大型のもので、口縁部外面に刺突文を施し、頸部には右方向にヘラ状工具によって施文する5条の沈線文をもつ。

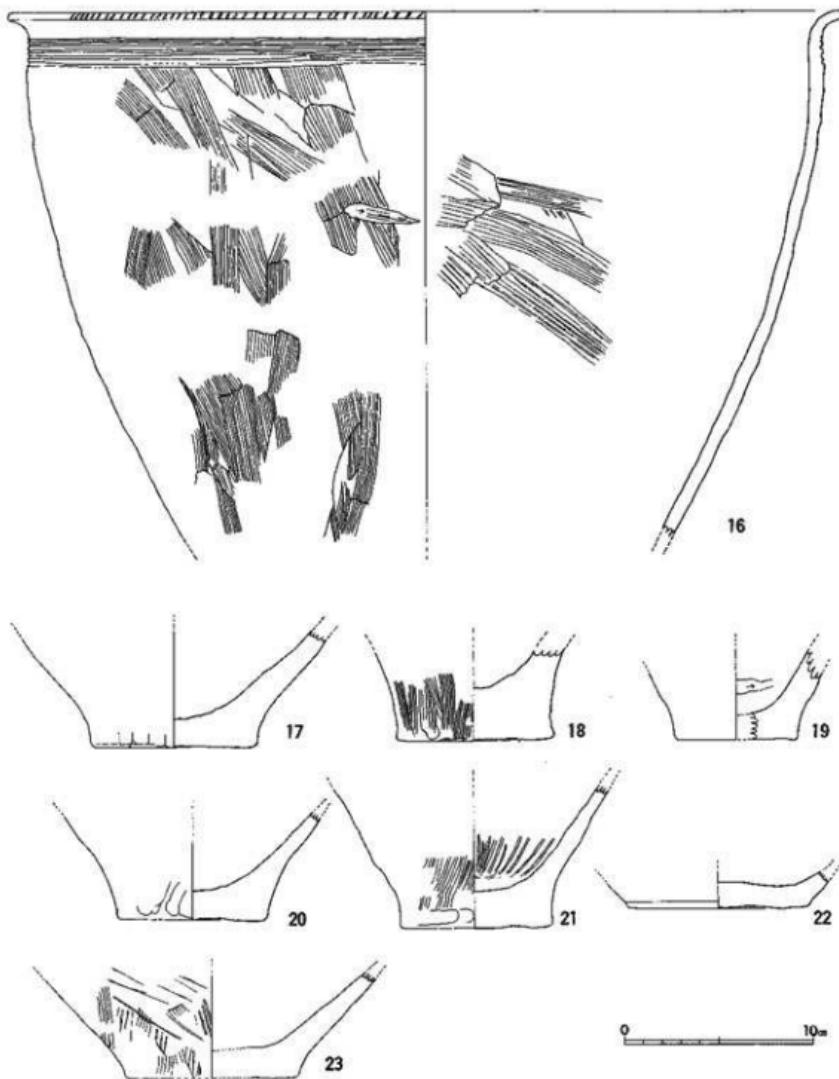
17～23は底部で、22・23以外は同じようなフォルムをもつ。17は底部径8.4cmで、頸部下半にミガキがなされているように見える。底部付近で指押えをする。18は底部径7.85～8.5cm、厚さ2.8cmを測るもので、外面に浅い縦位の刷毛目が残る。19は底部径6.3cmで、内面にケズリぎみの強いナデが見える。20は底部径7.5cmで、外面に押え痕とナデが見える。21は底部径8.3cm、厚さ1.92cmで、内面には中心に向けて放射状にケズリ痕があり、外面は縦位の刷毛目後、底部付近を指で押えてある。22は径9.4cmで、ナデ調整している。23は底部径9.3cmで、内面をナデ、外面に粗い縦位の刷毛目を施す。



第22図 弥生土器実測図 (1)



第23図 弥生土器実測図(2)



第24図 弥生土器実測図(3)

これらの土器はすべて、第23図14以外大粒の長石、石英、砂粒等を多量に含んでおり、色調も総じて黄白色か浅黄色を呈し、弥生前期の土器通有の様相を示しているといえよう。この中にはやや

古い様相を示すものもあるが、ほとんどが前期後半に位置付けられ、この限定される一時期に人々の営みが集中していたと考えられる。

土師器

第25図に示したものは土師器で、1～6はいわゆる古墳時代前期の複合口縁をもつ土器で、そのうち1～3は壺、4～6は甌である。1は推定口径14.4cm、頸部径9.6cmを測り、口縁部が直立するものである。口縁部は外面ともに強くナデ、内面頸部以下は横位にヘラケズリ後、ナデしている。2は口径18.0cm、頸部径10.1cmで、同様に強いナデ調整を基本としている。外面胴部上半から縦位の刷毛目後、ヨコナデ調整している。3は摩耗が著しいが、ヨコナデを基調に内面頸部には指頭痕があり、胴部は横位にヘラケズリを行なっている。口径17.7cm、頸部径10.0cm。1～3のいずれも淡黄褐色、灰白色を呈し、細砂粒、雲母粒を多く含んでいる。また、口唇部を外側につまみ出し、上面に面取りを行ない、口縁下端も外側へ強く突出させるなど共通の特徴をもっている。

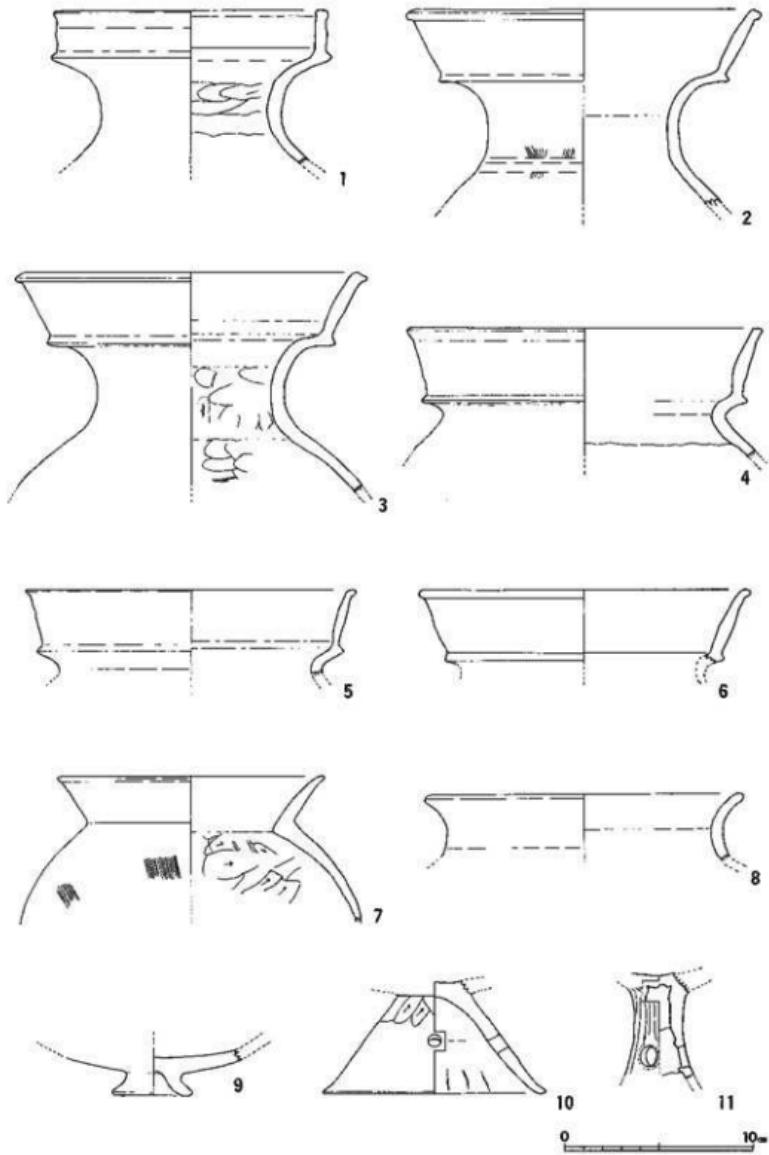
4は口径18.7cmで、口唇部上面を面取りし、口縁部はヨコナデ、外面胴部は刷毛目後ナデ、内面はヘラケズリと思われる。色調は灰白色で、雲母粒、長石粒を多量に含んでいる。5は口径17.3cm、口唇部をやや丸くつまみ出し、ヨコナデ調整を行なう。淡黄褐色を呈し、細砂粒を含んでいる。6は口径17.1cmで、5と同様の作りをもつ。細砂粒、雲母微粒を含み、淡褐色を呈している。7・8は中期以降の様相をもつ甌で、7は厚い頸部で屈曲し、外反しながら口縁部に至る。内面胴部は横位のヘラケズリ、外面は縦位の刷毛目後、ナデ調整している。8はゆるく外反して口縁部に至るもので、調整は7と同様のものと思われる。推定口径は7が14.2cm、8が16.4cmである。

9は低脚坏で、脚は短く外反して地に着く。脚高1.2cm、脚部径4.3cmを測り、外面黒褐色、内面淡黄褐色を呈するが、摩耗が著しく、調整は不明である。10は直線的に大きく開く畿内系と思われる小形器台の脚部で、脚部径12.0cmを測る。脚中央に3孔穿孔し、内面をヘラケズリの後、下半のみナデ調整し、外面を上半は縦位にヘラケズリ後ナデ、下半はヨコナデを施している。11は円筒状から下部で屈曲して開くと思われる高坏の脚部で、3孔を外側から穿孔している。内面は横位のヘラケズリ、外面は縦位のヘラミガキかと思われる。坏底部中央付近に明瞭なホゾをもっている。

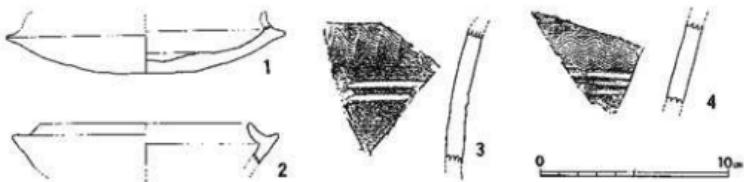
7・8以外は前期、いわゆる小谷式併行期に比定されるものと思われる。調整、色調、胎土ともにほとんど差がなく、一定の規律が介在していると考えられる。

須恵器

須恵器は総じて数が少なく、採集できたのは10片ほどである。1は坏身で、推定口径12.5cm、器高3.3cmを測り、平たい体部から斜位に口縁が立ち上がる。明青灰色を呈し、細砂粒を含む。調整は回転によるナデで、ヘラケズリは見られない。2は口径11.1cmを測る、口縁部が内傾して立ち上がる坏身である。細砂粒等を多量に含み、明オリーブ灰色を呈している。調整は不明。1・2とも



第25図 土器実測図



第26図 須恵器実測図

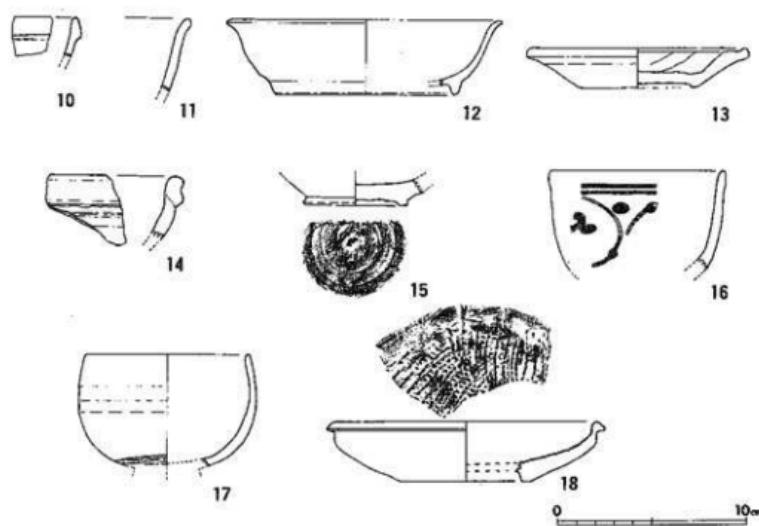
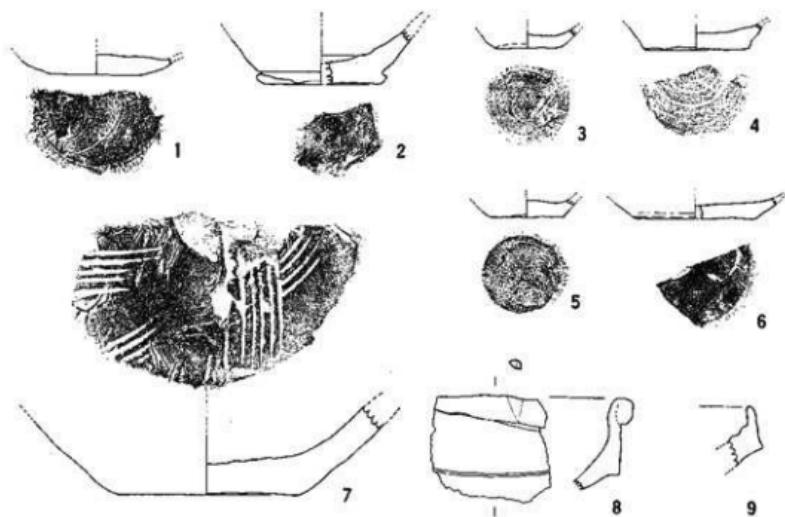
^{註8}に山本編年のIV期に相当する。3・4は甌の口縁部の破片で、3は12本の櫛描波状文の下に太い2条の沈線を施している。4は上端に1条の沈線文が見え、その下に10~12本の櫛描波状文、その下に2条の沈線文を施す。いずれも胎土は細砂粒で、色調は青灰色を呈している。後期通有のものである。

土師質土器・陶磁器

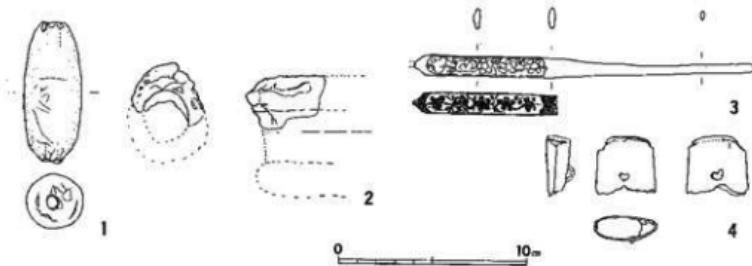
第27図1~7は土師質土器で、いずれも淡黄褐色、淡橙色を呈しており、三部竹崎遺跡全域で採集できるが、目立って多くはない。1は壺で、推定底部径5.2cmを測る。底部は厚く、体部に移行するところで、急激に薄くなる。底部左回転糸切り未調整で、細砂粒を密に含んでいる。2はやはり壺で底部径(6.1)cmを測り、底部の外側に粘土がはみ出ている。回転糸切り未調整で、細砂粒、雲母片を含んでいる。3・5は皿で、3は底部径3.5cmを測り、左回転糸切り未調整のものである。細砂粒をやや多く含む。5は底部径4.0cm、底部中央が盛り上がっており、底部右回転糸切り未調整。細砂粒を含む。4・6は壺で、4は底部径(5.4)cmのもので、底部右回転糸切り未調整である。細砂粒を含む。6は回転糸切り未調整、細砂粒を含むものである。7は底部径10.0cmを測る擂鉢で、平坦な底部を持ち、ナデ調整後深く、太い5条の沈線をまばらに施している。外面浅黄色、内面灰白色で、胎土は密である。

^{註9}8は瓦質の鉢で、薄い胴部から屈曲、厚い口縁部をもち、外側へ折り曲げ肥厚させる。口唇部上面に深さ1.3cmの刺突があるが、意味不明である。胴部が2次焼成を受け、ブツブツ状になっており、炭化物の付着が見られることから、土鍋としての用途が考えられる。9は備前の擂鉢の口縁部とを考えられるもので、口唇部をつまみあげるように作出する。3mm台の砂粒を含み、にぶい赤褐色を呈している。備前の中でもこの地域出土のものとしては、古い様相をもつものと思われる。

10・12は中国製白磁で、10は段の明瞭な玉縁口縁をもつ甌で灰白色の釉がきれいにかかるものである。白・黒色の極小粒子が混入し、太宰府編年の白磁碗第IV類に相当し、時期は12世紀代と考えられる。12は高台付皿で、低く小さい高台から内湾しながら体部は立ち上がり、口縁部でやや強く外反する。口径(14.3)cm、器高4.0cm、高台径(4.6)cmを測り、乳白色の釉がかかっており、高台下



第27図 土師質土器・陶磁器実測図



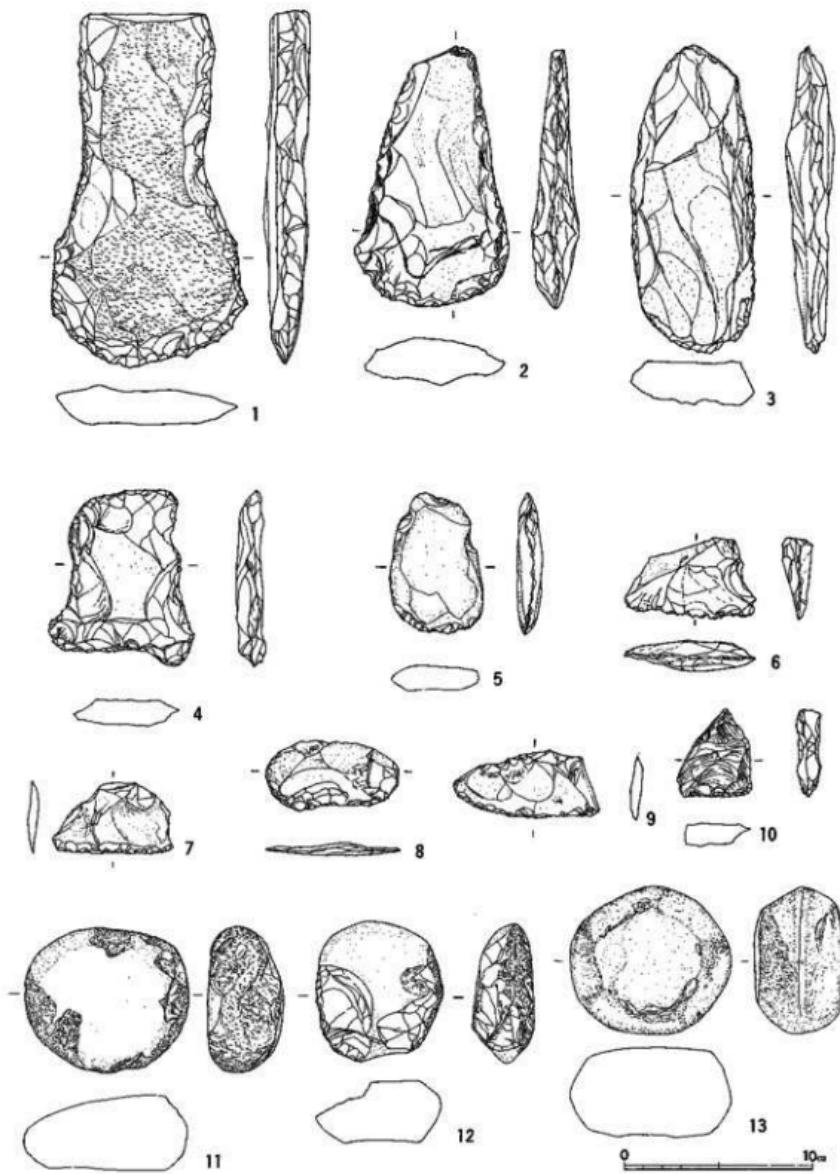
第28図 土製品・金属製品実測図

端の内外面で釉をかき取っている。16世紀の第2四半期から第3四半期のものと考えられる。^{註12} 11は青磁の碗で、口縁部でゆるく外反する。細砂粒・黒色粒子を含み、緑白色の釉がかかっている。16世紀代のものと考えられる。^{註13}

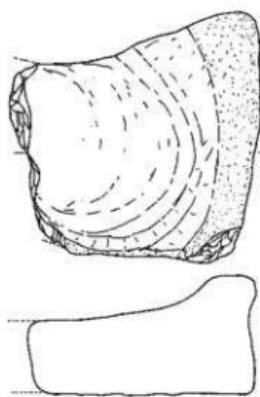
13は瀬戸美濃窯の台付皿で、器高2.15cm、口径(11.3)cm、高台径(6.2)cmを測る。底部は幕筒底で、立ち上がる体部を水平にした後、つまみ上げるような口唇部をもつ。長石粒を含み、陶土色は灰黃色、釉は浅黄色、一部黒褐色を呈している。底部外面には釉がかっているが、内面にはない。全体に磨耗が著しく、釉の剥離がひどい。瀬戸美濃の中でも古い様相をもつものと考えられる。14は瓦質の鉢で、口縁部を折り曲げ肥厚させ、外面を凹状にしている。強い回転ナデ調整が行われ、細砂粒を含み、赤色を呈している。地元産のものと考えられるが、時期は不明である。15・16は唐津で、15は高台付の碗と考えられる。低い高台は径が5.4cmあり、底部回転ヘラ切り未調整である。浅黄色の釉がかかるが、底部外面と高台は無釉である。16は陶胎染付で、口径(9.2)cmを測る。薄く緑がかった灰白色を呈する地釉にくすんだ藍色で染付をしている。口縁下部に2条線、花か葉を模した円文と茎を表す曲線を配している。18世紀代のものと考えられる。^{註15} 17は大きく内湾する布志名焼系の小型碗と思われ、口径(8.6)cmを測る。ややくすんだ濃草色の釉が全面にかかっている。近世以降のものであろう。18は幕筒底のおろし皿で、硬質で暗赤紫色を呈している。1単位10本の金属工具で器壁を起こすようにおろし部を加工。近代の地元産かと思われる。

土製品・金属製品

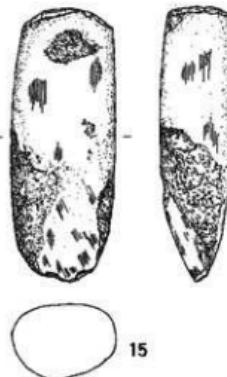
第28図1は土鍤で、全長7.45cm、最大幅3.16cm、孔径0.65~0.71cmを測る。細砂粒、雲母微粒を含み、浅黄色、一部暗褐色を呈する。にぎり痕がついており、ナデ調整がこれに加わっている。2は羽口の炉側先端部で、孔径2.6cm以上をもつものである。細砂粒を含み、黄灰褐色を呈するが、先端は高熱を受け赤褐色、灰白色で、一部溶融して黒色ガラス質になっている。^{註16} 3は髪搔、または笄柄と呼ぶ髪をとりつくろうための金具である。^{註17} 3と違い、当初実用として頭の地肌を搔いたり、



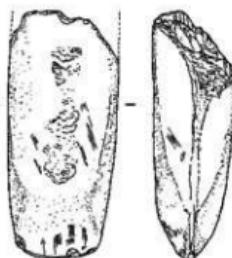
第29図 石器実測図 (1)



14



15



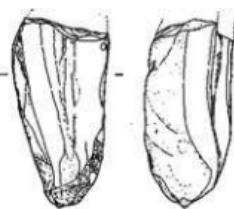
16



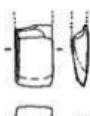
17



18



19



20



21

0 10m

第30図 石器実測図 (2)

長い髪の束をまとめるために用いられたが、江戸時代に入り、装飾物に変化した。現長18.4cm、最大幅1.12cm、最大厚0.32cmを測り、銅製で暗褐色を呈しているが、頭頂端の耳搔部を欠いている。さお部は何度も折り曲げた痕があり、実用として使ったとみられる。文様は梅木と思われ、幹から枝を伸ばし、5花を配している。女性専用のものではなく、武士などが太刀の鐔に小柄とともにさして^{註17}いたが、同地点で4を採集したことは興味深い。4は太刀の鞘尻か柄頭にある金具で、全長3.12cm、幅3.24cm、厚さ1.30cmを測る。銅製で一部縁背を噴いている。一枚銅板を加工し、端部を波形、中程にハート形の孔を両面に開けている。

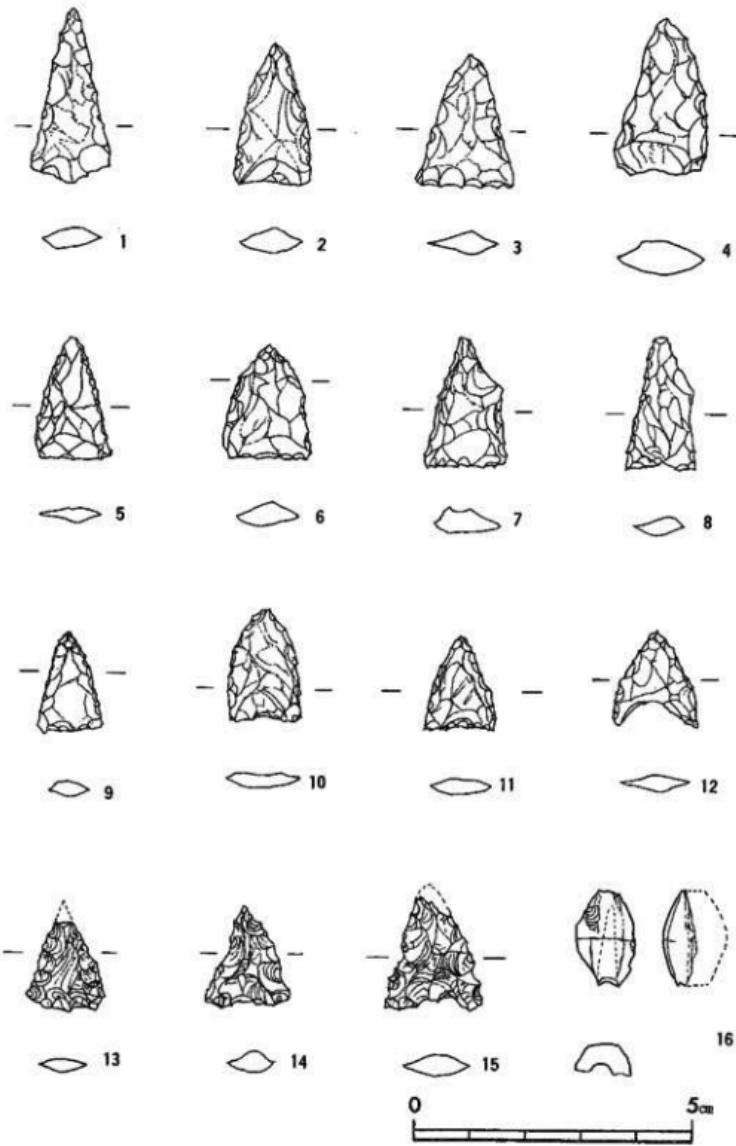
石 器

第29図1～3は打製石斧で、1は第20図F地点で採集した完形のものである。全長18.9cm、最大幅10.3cm、最大厚2.2cm、533gある。ゆるやかな肩部をもち、粗く刃部を作出する。表面を湾曲させ、土掘具としての使用が考えられる。裏面の刃部に擦痕が見られ、光沢が認められる。2は全長13.9cm、最大幅8.2cm、最大厚2.5cmの安山岩製で、284gを量る。扁平な石材の周縁を打ち欠き、刃部寄りに膨らみをもたせ重量感がある。淡灰色を呈する。3は片麻岩製で、表面に自然面を残し、裏面は敲打により粗く仕上げている。刃部、基部ともに鋭く、土掘具として使用したと考えられる。全長16.4cm、幅6.6cm、厚さ2.5cmで、353g。2・3ともにE地点からの採集資料である。

4～13はすべてC地点からの採集で、4は流紋岩製の有肩石斧である。全長9.5cm、幅7.8cm、厚さ1.4cmで、113g。灰色を呈し、周縁を加工し、刃部としているが、上部に摩滅がある。5は浅黄色を呈する全長7.7cm、幅5.0cm、厚さ1.3cm、69.2gの石斧で、基部に抉りが付くものである。

6～9はスクレーパーである。6は横長剥片下端を表裏交互に打ち欠き刃部とし、右端は粗く打ち欠く。重量は40.4g、全長7.0cm、幅4.5cm、厚さ1.6cm。7～9はサスカイト製。7は全長6.4cm、幅3.8cm、厚さ0.6cm、横長剥片下端を両側から丁寧に打ち欠き刃部としている。裏面は剥離一次面。黒色を呈し、15.8gである。8は横長剥片上端を残して加工し、左側を刃部としているようである。暗灰色で、全長7.2cm、幅3.8cm、厚さ0.7cm、20.4gある。9は右端と上端の左側を残して加工しており、21.8g、長さ7.9cm、幅3.7cm、厚さ0.6cmを測る。第22図1の弥生土器と同地点で採集した。

10は全長4.3cm、幅4.0cm、厚さ1.4cmの玉髓製楔形石器で、26.5gの重量をもつ。暗緑色、乳白色を呈し、一次剥離面を多く残す粗い作りである。刃部の摩滅が著しい。11は全長8.8cm、幅7.7cm、厚さ4.0cm、重量377gの円礫をそのまま利用した敲石で、握りを良くするため指の当たる位置を打ち欠いている。12も円礫を利用した敲石で、灰色を呈し、長さ7.5cm、幅6.8cm、厚さ3.3cm、214gある。13も敲石。花崗岩円礫で、全長8.5cm、幅7.9cm、厚さ4.8cm、472gある。片面に深さ1mm、径2.5mmの凹みがあり、全体に擦痕があることから敲石として使用した後、磨石として使用したと思われる。



第31図 石鏃・切子玉実測図

第30図14は13.4×13.4×6.4cm、1,541gの石皿で、湾曲し、凹状をなす。右側面は縁に筋を入れてある。石皿の破片を磁石として二次使用していると思われる。15・16は片麻岩製磨製石斧で、15は全長14.6cm、幅5.5cm、厚さ4.1cm、564gある。緑灰色の完成品で、敲打後浅く研磨している。基部に対し刃部がねじれているが、蛤刃石斧の形態に類似している。刃縁の状態は使用痕、または使用時の欠損と思われる。16は基部を欠くが、現長13.3cm、幅5.9cm、厚さ4.4cm、564g。敲打後研磨、特に刃部は丁寧に加工。17は同じく片麻岩製の磨製石器で、明緑灰色を呈し、現長18.6cm、幅5.4cm、厚さ3.7cm、555gある。全面に敲打痕が残り、基部側面に浅い研磨が見られる。使用による欠損なのか、未完成なのか不明である。18は磨製石斧で、基部を欠くが、石材の側端を打ち欠き、刃部を一部研磨している。現長7.1cm、幅6.0cm、厚さ2.4cm、重さは144gで、淡黄色を呈している。19は地元で山田谷石と呼ぶ砂岩製の磁石で、三面に使用痕が残るものである。うち一面のみに幅1.3cm前後のゆるやかなU字状溝がある。にぶい黄橙色で、全長10.2cm、幅5.5cm、厚さ4.3cm。重さは239gである。

20・21は緑色凝灰岩製の扁平片刃石斧で、20は現長3.25cm、幅2.01cm、厚さ0.88cmの非常に丁寧に研磨されたものである。一側縁に擦切痕が残っている。9.96gの重さで、明緑灰色を呈する。21も緑色凝灰岩製で、全長5.5cm、幅0.98cm、厚さ0.6cmを測り、4.15gある。基部がつまみ状を呈するもので、やはり丁寧な研磨がなされている。

石器は、1がF地点、2・3がE地点、4～18、20・21がC地点での採集で、19は不明である。表採資料であるため明言できないが、土器の散布状況が明確なので、それとの共伴関係があるものと考えられ、ある程度の時代相を反映していると思われる。

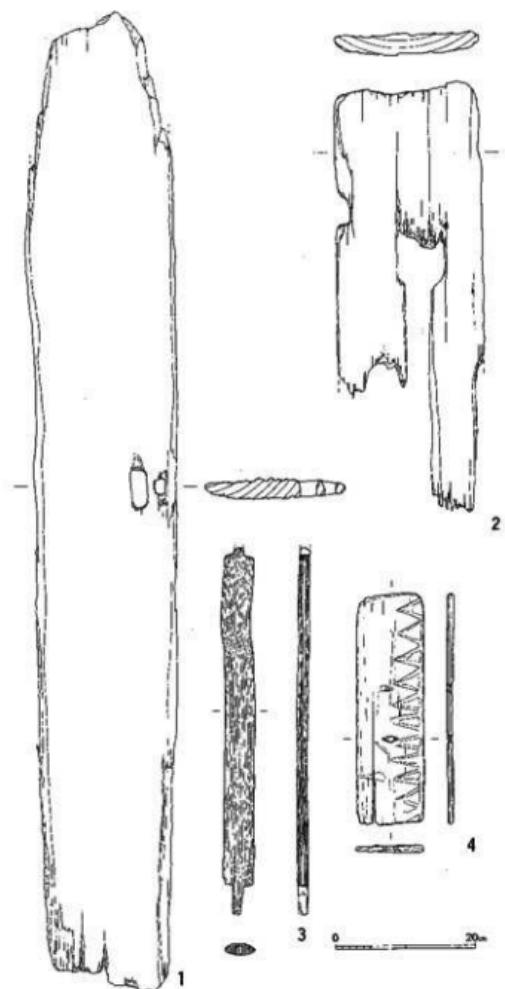
石鏸・切子玉

第31図の1～15は石鏸で、7・12が安山岩製、13～15が黒曜石製、それ以外はすべてサヌカイト製である。1がE'地点、13がC地点のはかはE地点からの採集である。1は長めの石鏸で唯一の凸基式、12・14・15は凹基式である。その他は平基式を呈しており、7・8は縄文時代後半に通有する有肩（片側）の石鏸である。特徴として、香川県高松市金山周辺を産地とするサヌカイト製が^{註19}多く、黒曜石製が少ない。しかし、いわゆる剥片やチップは黒曜石のものが多くあり、サヌカイトを主原料とするとは断定できない。また、基部の形状は平基式を呈するものが多く、凸基式はほとんど見られないこと、石鏸の大部分がE地点からの採集であり、この地点が縄文土器を多く含んで^{註20}いることなどから縄文時代特有の形態で、散布状況を反映しているといえる。

16は水晶製の切子玉で、現長1.74cm、幅1.09cm、厚さ0.53cmを測り、半分を欠損するものである。完形ならば、6面を丁寧に磨いて形出させ、一方から穿孔しようとしたが、途中で止まっている。この穿孔時に欠損した可能性が高い。

石 鋸 観 察 表

器種	標因番号	図版番号	採集地点	法量(cm)	重量(g)	石材	形態・文様の特徴	中央断面	備考
石鋸	第31図1	29	E'	全長 3.11 最大幅 1.42 最大厚 0.45	1.31	サスカイト	凸基式	両凸	緻密
石鋸	2	29	E	全長 2.55 最大幅 1.35 最大厚 0.41	1.19	サスカイト	平基式	両凸	
石鋸	3	29	E	全長 2.36 最大幅 1.74 最大厚 0.41	1.00	サスカイト	平基式	両凸	緻密
石鋸	4	29	E	全長 2.80 最大幅 1.60 最大厚 0.60	2.44	サスカイト	平基式 片面に第一剥離面を多く残す	両凸	
石鋸	5	29	E	全長 2.19 最大幅 1.35 最大厚 0.26	0.57	サスカイト	平基式	やや両凸	
石鋸	6	29	E	全長 2.20 最大幅 1.58 最大厚 0.43	1.26	サスカイト	平基式	両凸	
石鋸	7	29	E	全長 2.30 最大幅 1.50 最大厚 0.42	1.18	安山岩	平基式 片側有肩	片凸	縄文晩期?
石鋸	8	29	E	全長 2.40 最大幅 1.28 最大厚 0.39	0.90	サスカイト	平基式 片側有肩	両凸	縄文晩期?
石鋸	9	29	E	全長 1.80 最大幅 1.20 最大厚 0.29	0.47	サスカイト	平基式	やや両凸	
石鋸	10	29	E	全長 2.01 最大幅 1.31 最大厚 0.28	0.63	サスカイト	両面に第一剥離面を多く残す	片凸	
石鋸	11	29	E	全長 1.68 最大幅 1.30 最大厚 0.28	0.52	サスカイト	両面に第一剥離面を多く残す	やや両凸	
石鋸	12	29	E	全長 1.70 最大幅 1.51 最大厚 0.25	0.30	安山岩	凹基式	両凸	
石鋸	13	29	E	全長 1.52 最大幅 1.40 最大厚 0.28	(0.50)	黒曜石	平基式	片凸	
石鋸	14	29	E	全長 1.80 最大幅 1.50 最大厚 0.40	0.68	黒曜石	丁寧な剥離	片凸	
石鋸	15	29	E	全長 2.01 最大幅 1.75 最大厚 0.40	(0.92)	黒曜石	凹基式 丁寧な剥離	両凸	



第32図 木製品実測図

註 (1) 宍道正年『島根県の縄文式土器集成 I』(1974)

宍道正年「島根県の縄文土器の研究—編年を中心にして」『松江考古』第3号(1980)

杉原清一『下鶴倉遺跡』仁多町教育委員会(1990)

柳浦俊一「島根県の縄文時代後期中葉～晩期土器の概要」『島根考古学会誌』第11集(1994)

ここに挙げたもの以外に、図示していないが、細織文を施した土器片をA地点より採集してい

木製品

第32図 1は現長139.4cm、幅21.2cm、厚さ3.0cmを測る板材で、中央端寄りに長方形と円形の2孔を開けている。2は現長61.2cm、幅20.8cm、厚さ3.2cmの板材で、中央に方形の孔を開けているようである。いずれも何に使用されたものか判明しない。3は現長52.8cm、幅4.3cm、厚さ1.5cmの両端に茎部を作出したもので、途中でやや曲がっている。織機具と思われ、そのうちの縫打具に当たるものではないかと考えられる。^{註21}

4は現長33.0cm、幅9.8cm、厚さ0.72～0.95cmを測り、中央に7cmの間隔をおいて2孔の円孔が開き、片方の長軸の端に11個の鋸歯文を彫り込んでいる。意味、用途は不明である。

る。

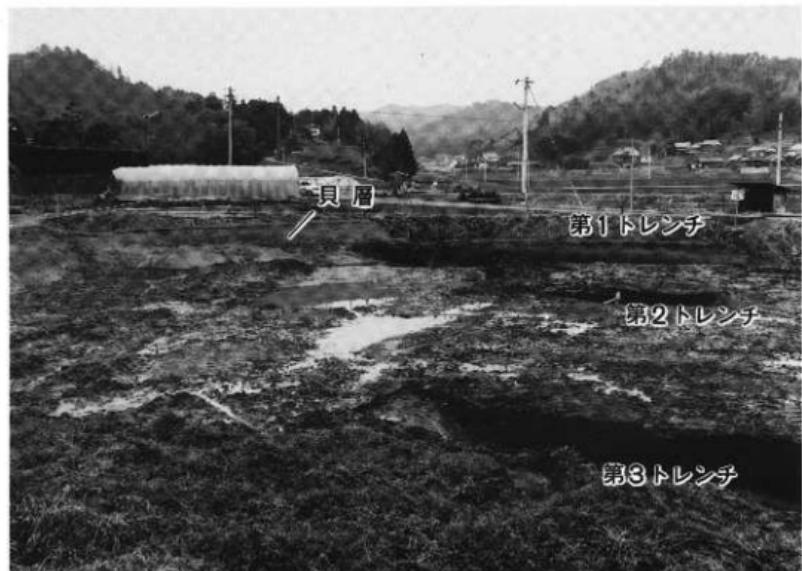
- (2) 濑古諒子ほか『朝鈴川改修工事に伴うタテチヨウ遺跡発掘調査報告書』IV 島根県教育委員会(1992)などに数は少ないが、出土例がある。
- (3) 碓田由紀子「山陰地方における前半期弥生文化の一考察」『島根考古学会誌』第5集(1988)
- (4) 柳浦後一氏の御教示による。
- (5) 東森市良・前島己基・松本岩雄「弥生式土器集成」「八雲立つ風土記の丘研究紀要」I (1977)
松本岩雄「弥生土器の様式と編年 山陽・山陰編」木耳社(1992)
- (6) 宮本正保氏の御教示による。
- (7) 藤田憲司「山陰「鍵尾式」の再検討とその併行関係」『考古学雑誌』64-3 (1979)
房宗寿雄「『山陰地域』における古墳形成期の様相」『島根考古学会誌』第1集(1984)
赤沢秀則「出雲地方古墳出現前後の土器編年試案」『松江考古』第6号(1985)
花谷めぐむ「山陰古式土師器の型式学的研究」『島根考古学会誌』第4集(1987)
松山智弘「出雲における古墳時代前半期の土器の様相」『島根考古学会誌』第8集(1991)
- (8) 山本 清「山陰の須恵器」『島根大学開学十周年記念論集』(1960)
- (9) 出雲市・三田谷遺跡から同様のものが出土している。林 健亮氏の御教示による。
- (10) 西尾克己氏の御教示による。
三宅博士ほか『朝鈴川河川改修工事に伴うタテチヨウ遺跡発掘調査報告書』III 島根県教育委員会(1990)
第173図C16に同様の形態をもつものがあり、米子市・久米第1遺跡からも出土例がある。
小原貴樹「米子平野出土の中世陶磁器」『松江考古』第8号(1992)
- (11) 守岡正司氏の御教示による。湖陵町では常楽寺遺跡での出土がある。
西尾克己・守岡正司「常楽寺遺跡と庭反II遺跡の性格について」『町誌研究』3 湖陵町教育委員会(1994)
- (12) 西尾克己氏の御教示による。
- (13) 常楽寺遺跡と庭反II遺跡での出土がみられる。前掲書(11)。
- (14) ト部吉博氏の御教示による。
- (15) 内田律雄氏の御教示による。
- (16) 船木与次兵衛村政の実子3人が1750年以降に窯煙を上げ、開始されたものだが、これは少なくとも19世紀以降のものと考えられる。
- (17) 藤間 亨「布志名窯」『島根県大百科辞典』下(1982)
- (18) 橋本遵子「笄」、鈴木敬三「髪搔」『国史大辞典』5 吉川弘文館(1990)
- (19) 西尾克己ほか『富田川河床遺跡発掘調査報告書』III 島根県教育委員会(1983)
- (20) 竹広文明氏の御教示による。
- (21) 平野芳英「隱岐島産の黒曜石」『山陰考古学の諸問題』(1986)
竹広文明氏の御教示により、広島県・冠高原は安山岩の産地であることが判明した。
- (22) 湖西線関係遺跡発掘調査団『湖西線関係遺跡発掘調査報告書』滋賀県教育委員会(1973)
- (23) 竹内晶子「織機」『弥生文化の研究』5 雄山閣(1985)
内田律雄ほか『朝鈴川河川改修工事に伴う西川津遺跡発掘調査報告書』IV(海崎地区2)島根県教育委員会(1988) 第147図、および本文195頁。

図 版

図版1（御領田遺跡）



御領田遺跡近景（西から）

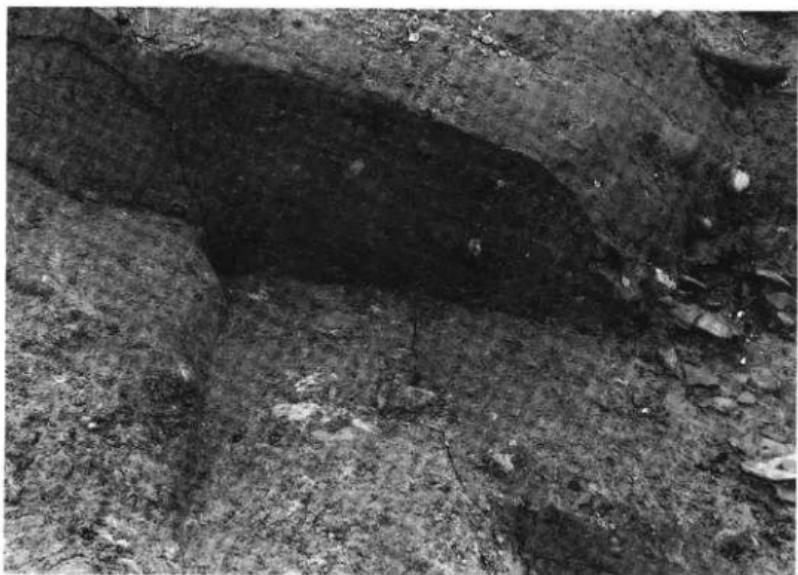


御領田遺跡調査区全景（北東から）

図版2（御領田遺跡）



第1 トレンチ豊穴住居跡土層（北東から）



第1 トレンチ豊穴住居跡掘り方検出状況（北東から）

図版3（御領田遺跡）



第1 トレンチ整穴住居跡黒褐色土層遺物検出状況（南西から）



第1 トレンチ整穴住居跡黒褐色土層遺物検出状況（北東から）

図版4（御領田遺跡）



第1 トレンチ堅穴住居跡黒褐色土層土器出土状況



第1 トレンチ堅穴住居跡黒褐色土層石斧出土状況

図版5（御領田遺跡）

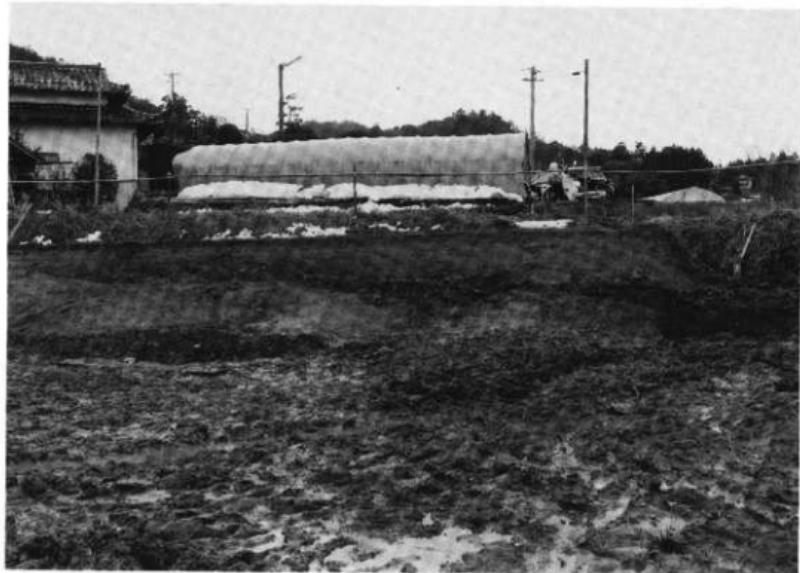


第1 トレンチ堅穴住居跡（南西から）

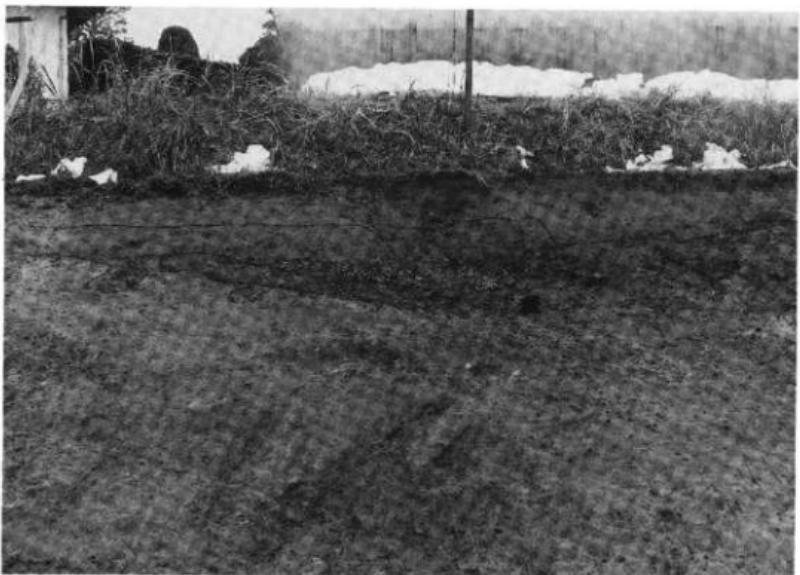


第1 トレンチ堅穴住居跡（北西から）

図版6（御領田遺跡）

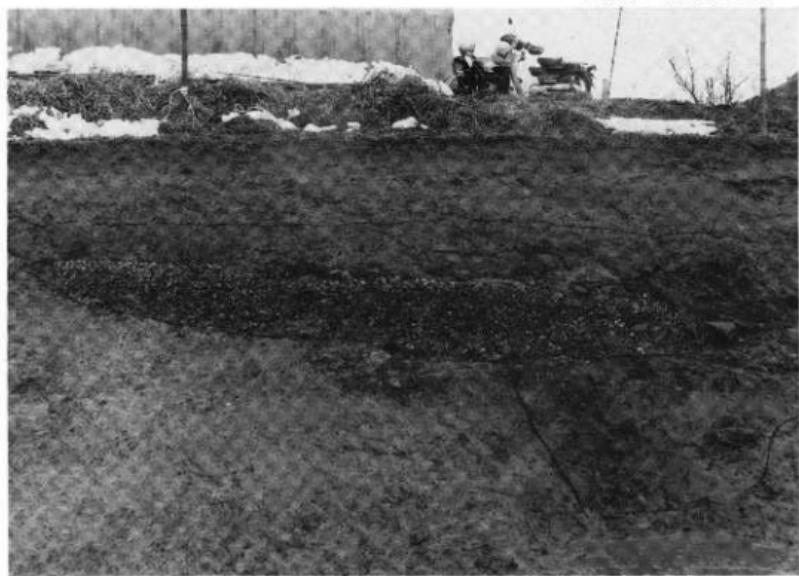


圃場法面貝層露出状況（北東から）

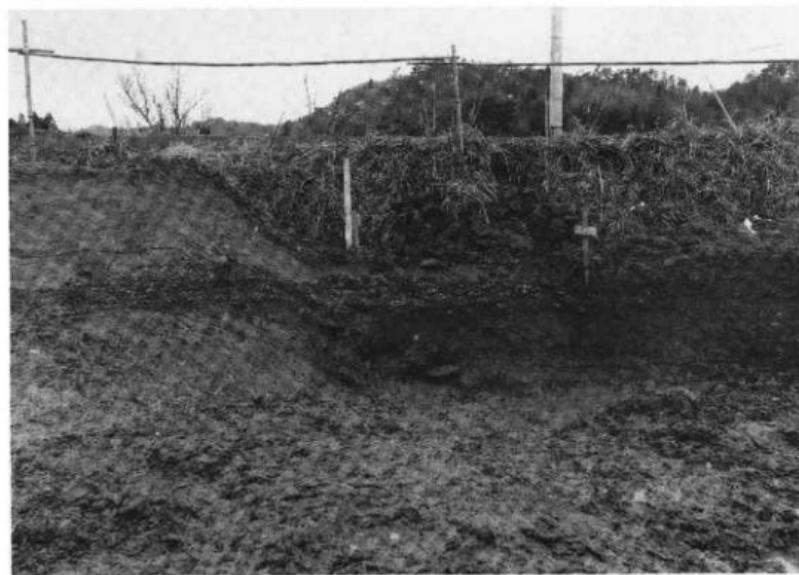


圃場法面貝層露出状況南東端部（北東から）

図版7（御領田遺跡）

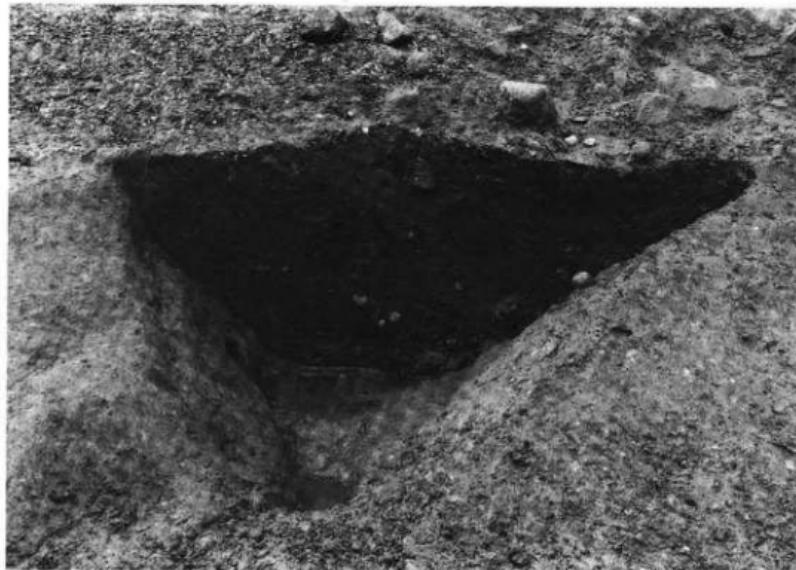


圖場法面貝層露出状況中央部（北東から）



圖場法面貝層露出状況北西端部（北東から）

図版8（御領田遺跡）

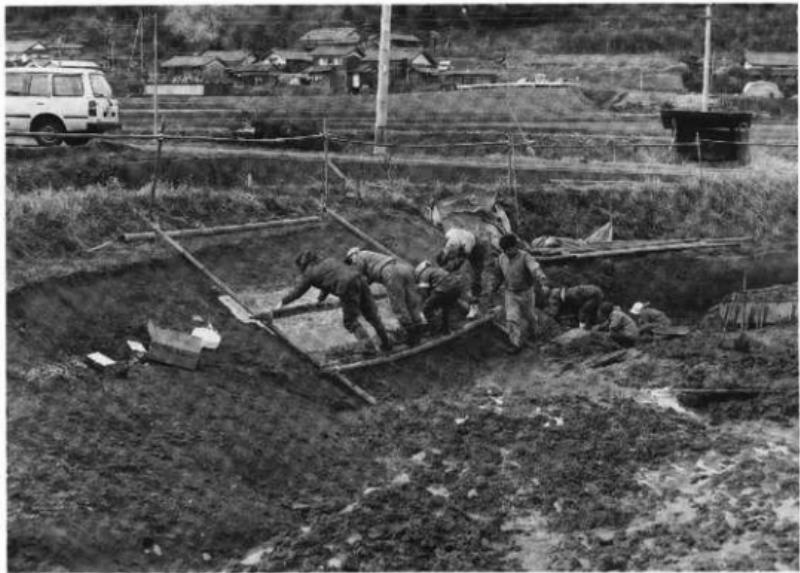


囲場法面貝層下溝検出状況（北東から）

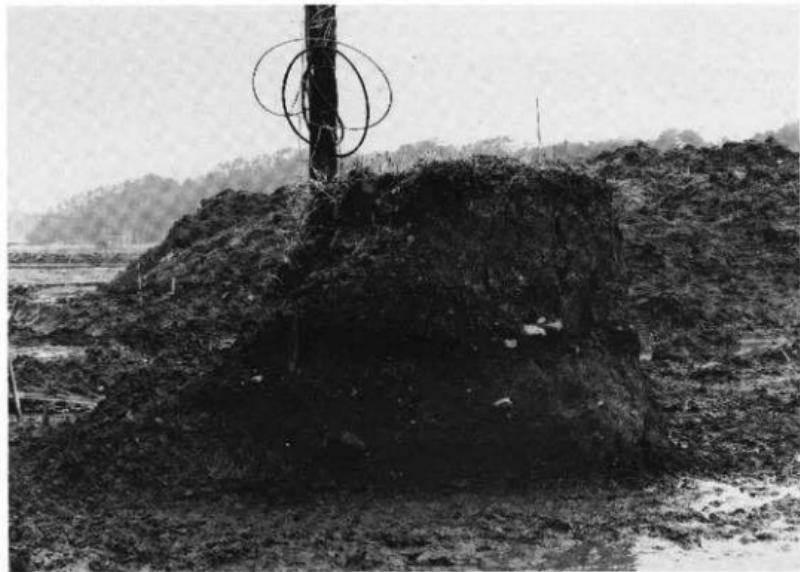


囲場法面貝層下溝検出状況（南から）

図版9（御領田遺跡）

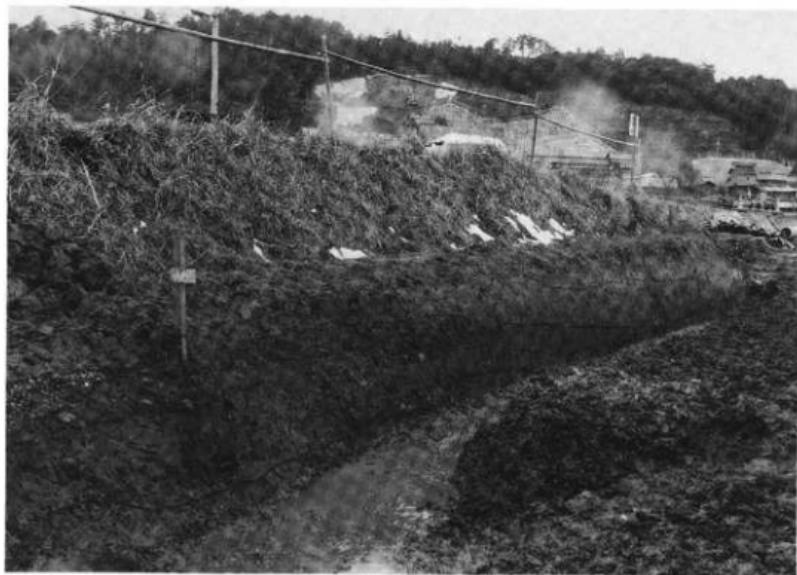


圓場法面貝層剥取作業風景

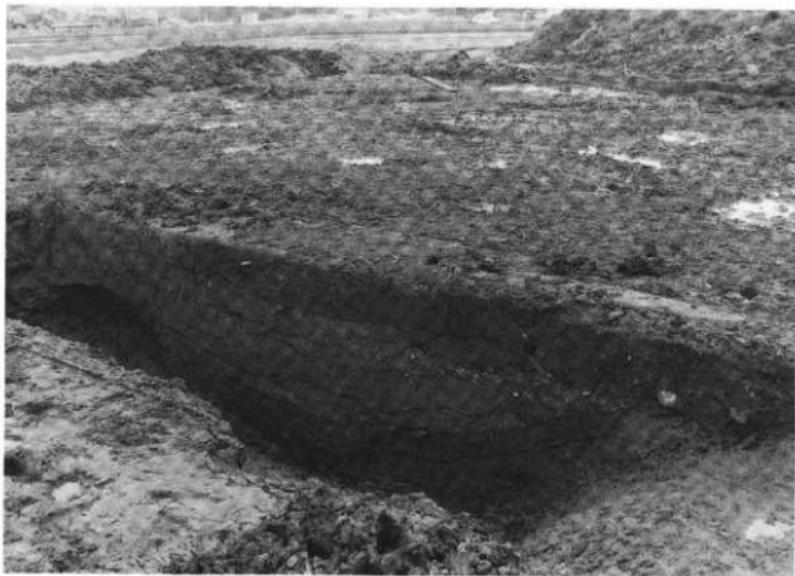


旧圓場残丘土層（南から）

図版10（御領田遺跡）

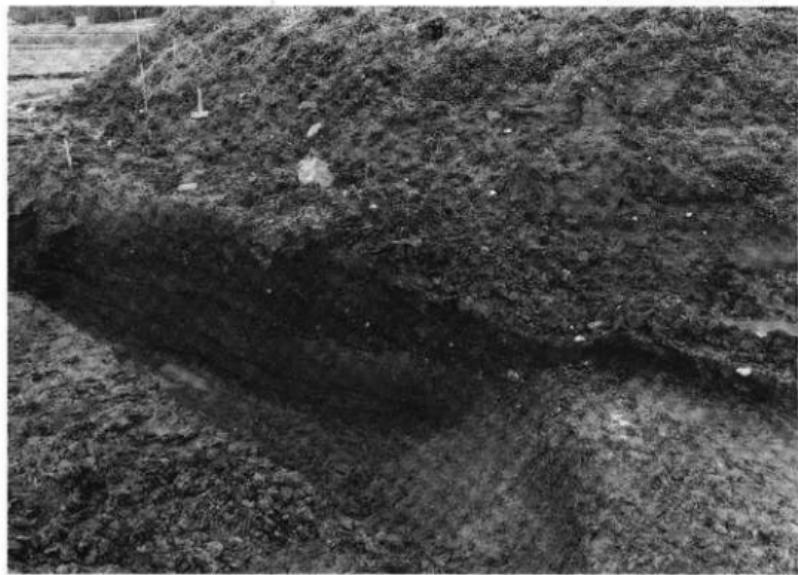


第1 トレンチ土層（東から）

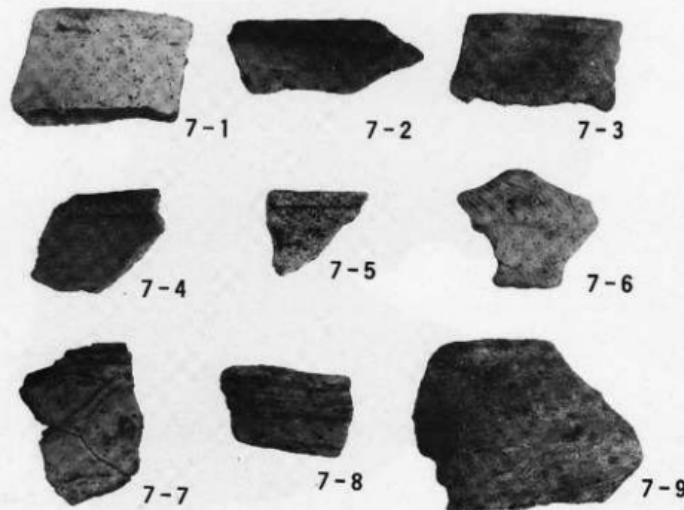


第2 トレンチ土層（南西から）

図版11（御領田遺跡）

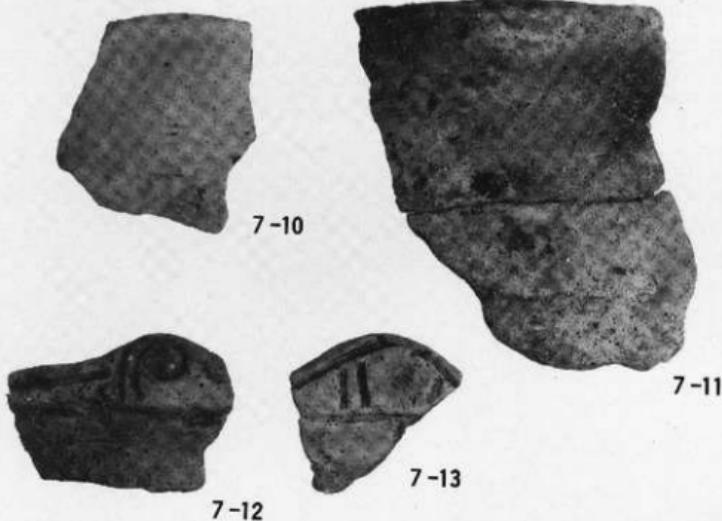


第3 トレンチ土層（南西から）

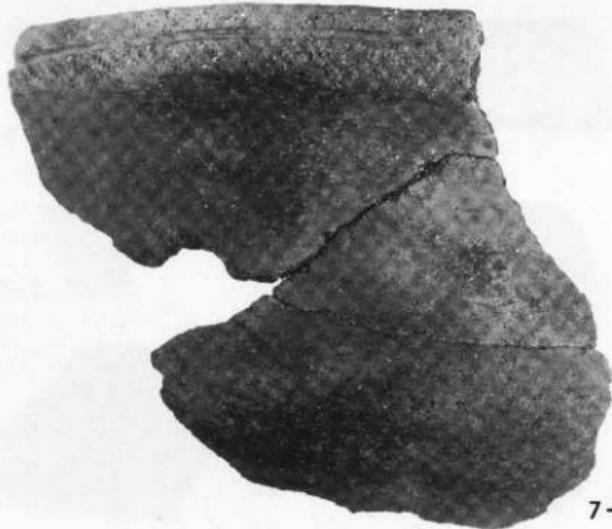


第1 トレンチ縄文土器 (1)

図版12（御領田遺跡）

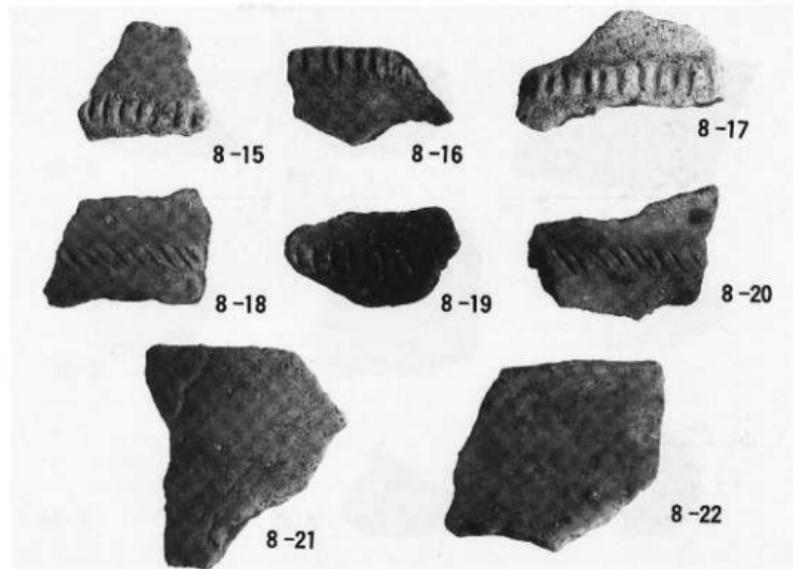


第1 トレンチ縄文土器 (2)

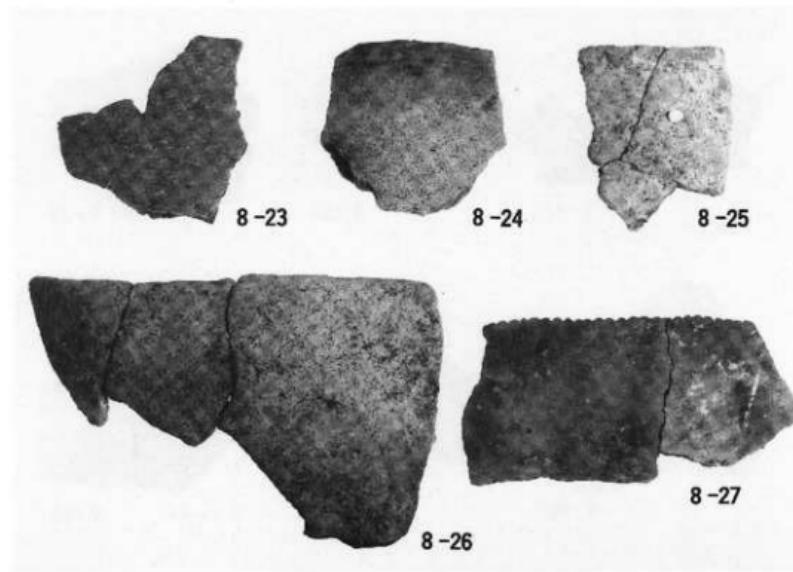


第1 トレンチ縄文土器 (3)

図版13（御領田遺跡）

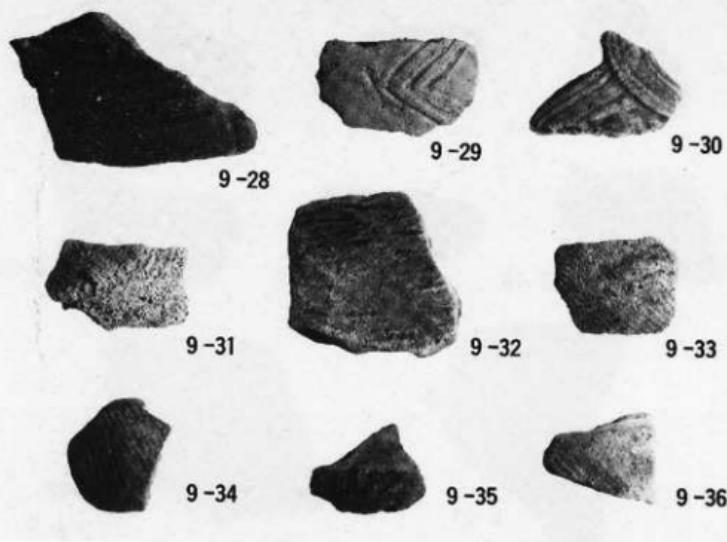


第1 トレンチ縄文土器 (4)

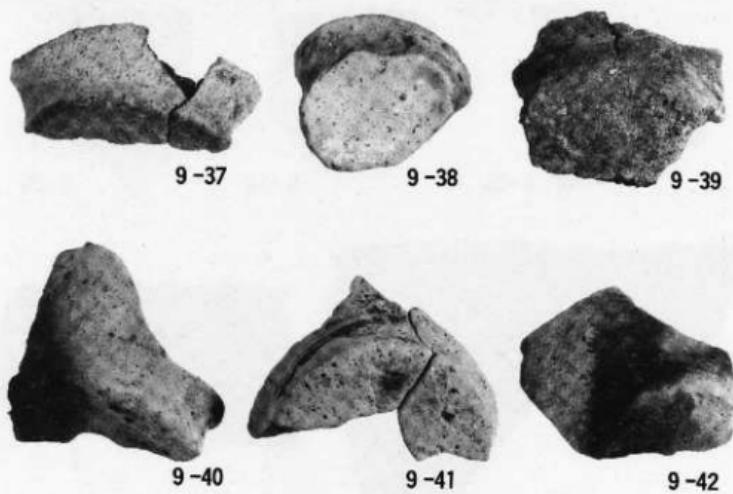


第1 トレンチ縄文土器 (5)

図版14（御領田遺跡）

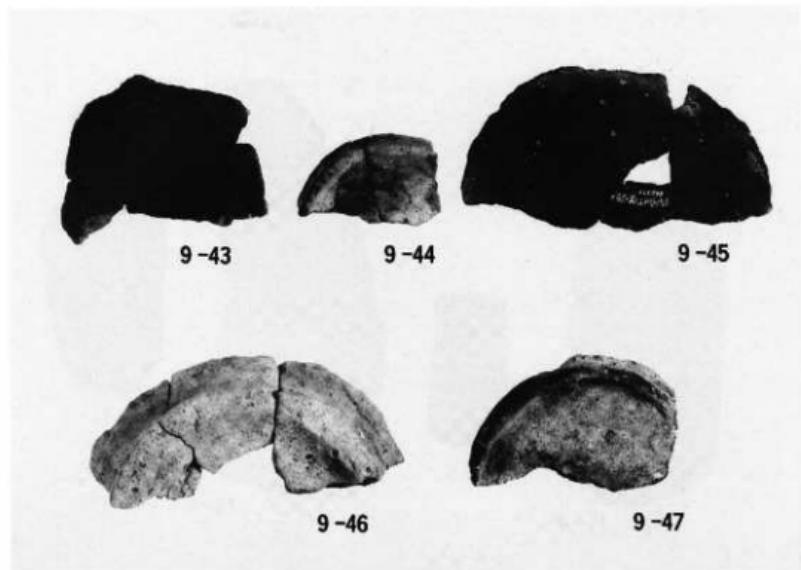


第1 トレンチ縄文土器 (6)

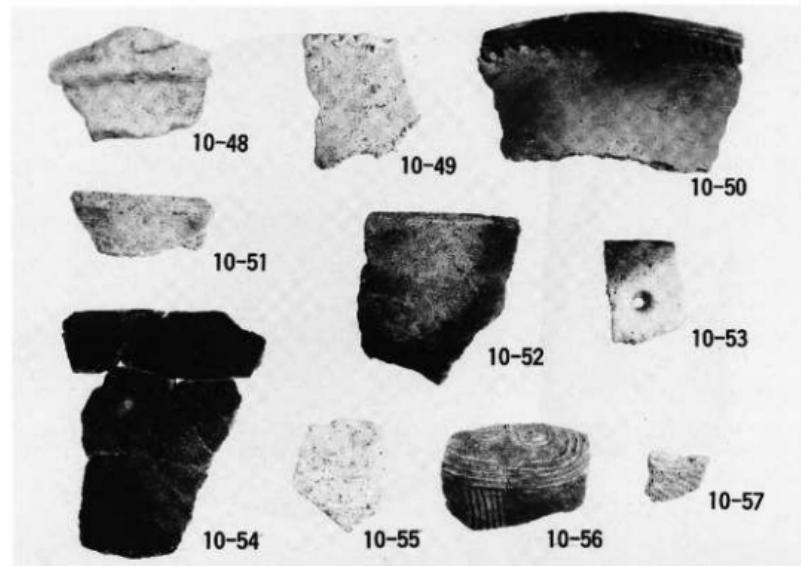


第1 トレンチ縄文土器 (7)

図版15 (御領田遺跡)

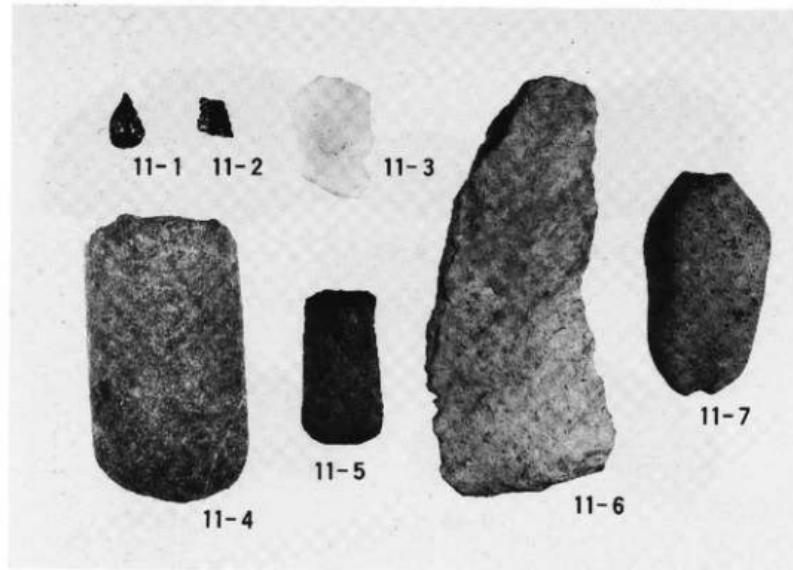


第1 トレンチ縄文土器 (8)

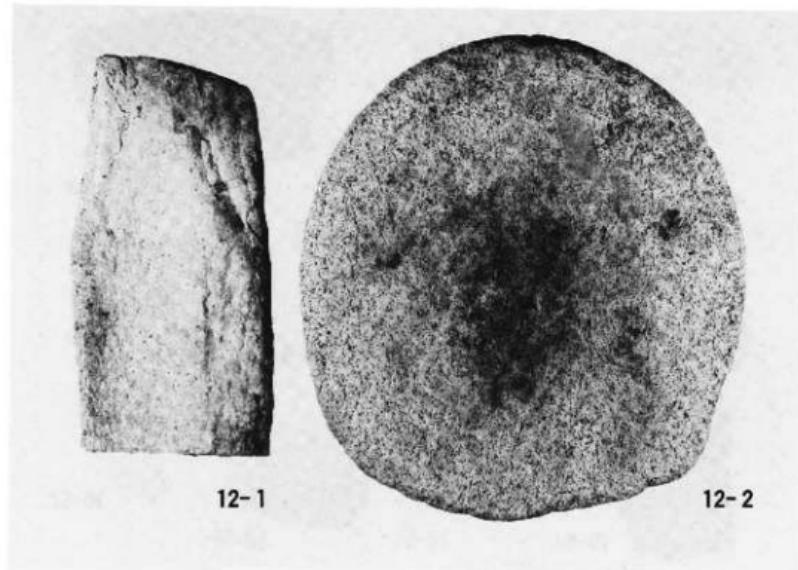


第1 トレンチ竪穴住居跡出土縄文土器

図版16（御領田遺跡）

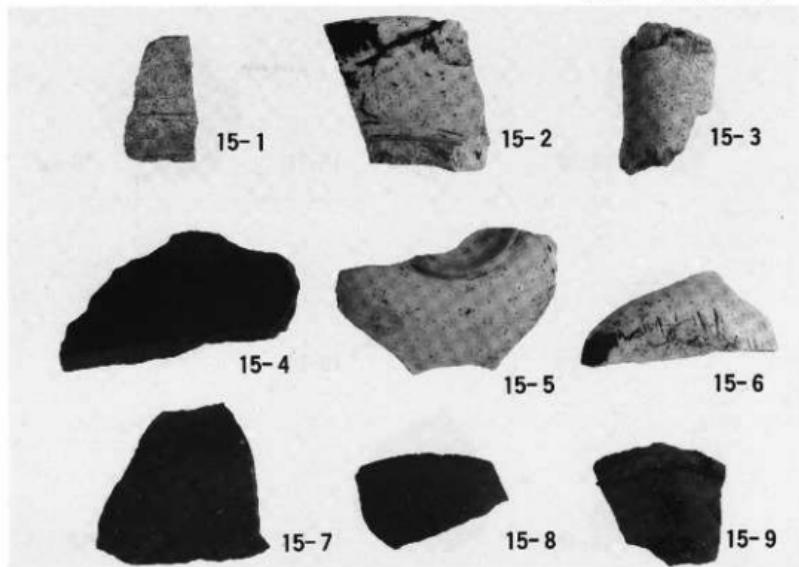


石器類 11-3圓場残丘、11-7第1トレンチ付近表採、他は第1トレンチ黒褐色土層

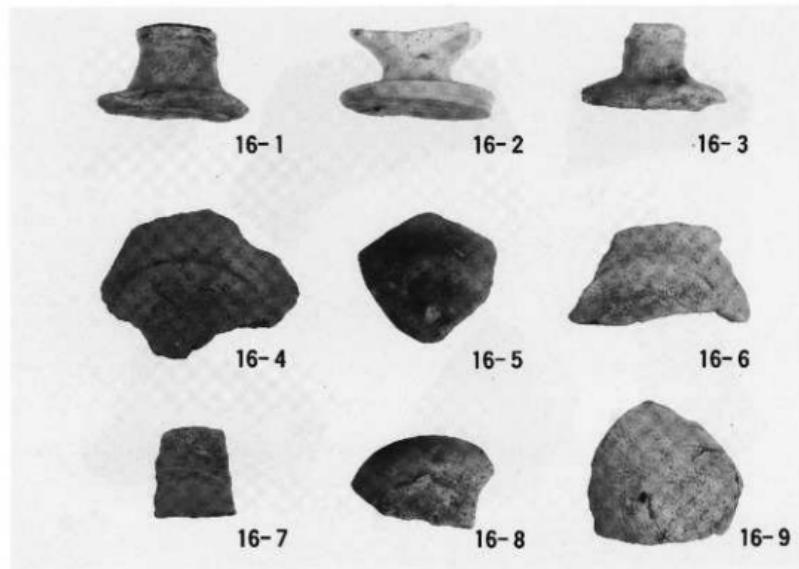


第1トレンチ堅穴住居跡出土石皿類

図版17（御領田遺跡）

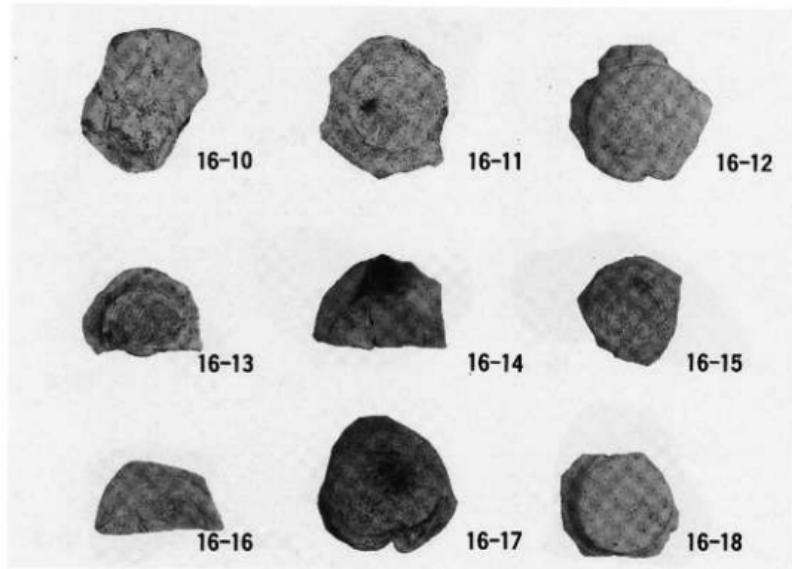


土師器・須恵器 15-4第1トレンチ、15-7第3トレンチ、その他は圓場残丘

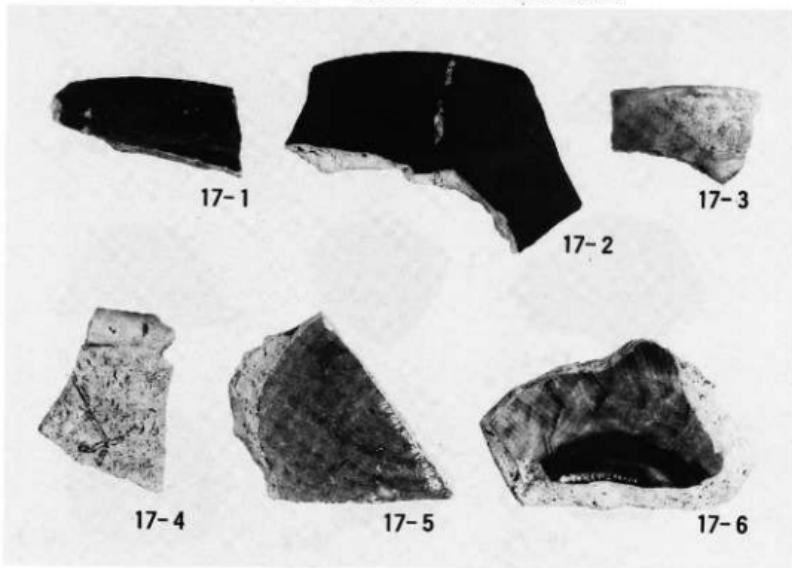


土師質土器(1) 16-3.6.7…第1トレンチ、その他は圓場残丘

図版18（御領田遺跡）

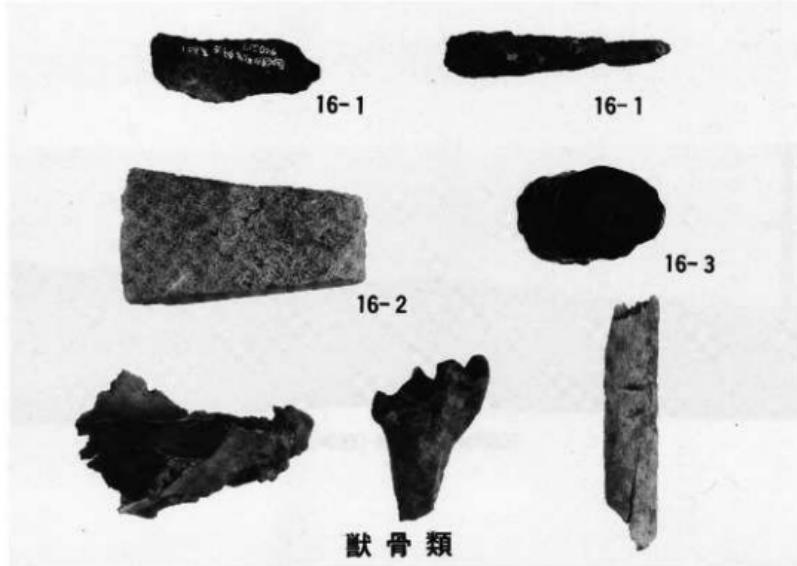


土師質土器(2) 16-10, 16-16…第1トレンチ、16-17…第2トレンチ
16-18…第3トレンチ、その他は圓場残丘

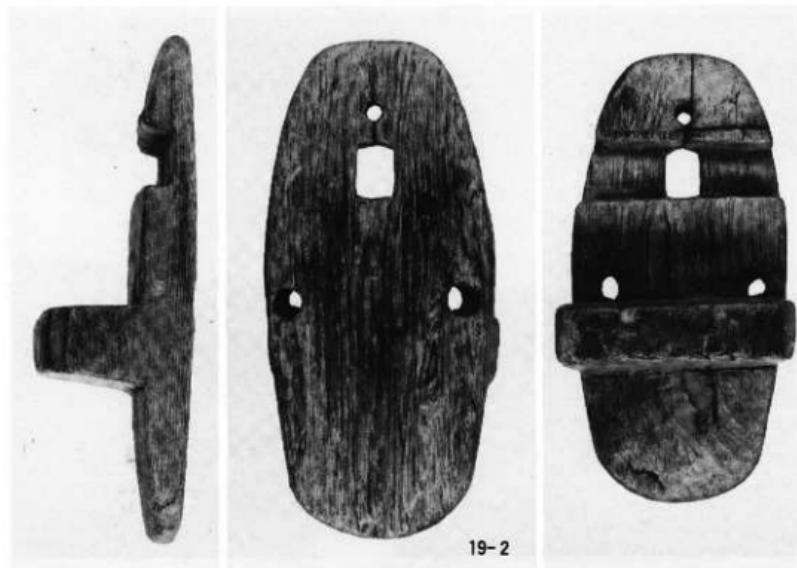


瓦質土器 17-5第1トレンチ、その他は圓場残丘

図版19 (御領田遺跡)



鉄製品他 16-1.2…塗場残丘、その他は貝層中



第3トレンチ出土下駄